

令和元年度 報告書

英国大学医学部における
臨床実習のための短期留学
Clinical Elective Attachment

ニューキャッスル大学医学部
Newcastle University

ロンドン大学セントジョージ校医学部
St George's, University of London

オックスフォード大学医学部
University of Oxford

グラスゴー大学医学部
University of Glasgow

公益財団法人 医学教育振興財団
Japan Medical Education Foundation

令和元年度「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」について

本短期留学は、卒前臨床教育の充実向上を図るため、医学教育振興財団が推薦する日本の医学生を、英国大学医学部における臨床実習に4週間派遣するものである。平成2年3月に第1回の派遣が行われ、派遣総数は450名を越えている。

令和元年度は全国の国公立大学医学部より36名の学生の応募があり、財団の選考委員会により16名を選考した。留学期間は令和2年3月2日（月）～3月27日（金）-ニューキャッスル、ロンドン、オックスフォード、グラスゴーの各大学、令和2年6月1日（月）～6月26日（金）-リーズ大学、の予定であった。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響でリーズ大学が受入れを中止するなどの状況となり、以下の4大学に8名の学生が留学し、8名全員が実習途中で日本に帰国した。

- ・ニューキャッスル大学医学部（3名）
- ・ロンドン大学セントジョージ校医学部（2名）
- ・オックスフォード大学医学部（2名）
- ・グラスゴー大学医学部（1名）

当初計画より留学者数が少なくなり、また短期間となるという結果となったが、新型コロナウイルス禍の中、留学生は懸命に努力し、苦勞を乗り越え臨床実習に取り組んだ。この貴重な経験が今後の留学生の活躍に活かされるとともに、医学教育の充実の一助となることを期待している。

令和2年8月17日

公益財団法人 医学教育振興財団

◆ ニューキャッスル大学医学部			<i>Page</i>
愛媛大学	古賀菜奈子	04
順天堂大学	久永めぐみ	11
帝京大学	平野 零	16
◆ ロンドン大学セントジョージ校医学部			
群馬大学	西岡凜太郎	23
京都府立医科大学	須賀 友子	30
◆ オックスフォード大学医学部			
群馬大学	寺島 里佳	38
浜松医科大学	張 択合	48
◆ グラスゴー大学医学部			
慶應義塾大学	浅井 崇博	54

ニューキャッスル大学医学部

Newcastle University

2020.03.02~2020.03.17

◇愛媛大学	古賀菜奈子
◇順天堂大学	久永めぐみ
◇帝京大学	平野 零

英国大学医学部短期臨床実習を終えて

愛媛大学医学部医学科 6年 古賀 菜奈子

1.はじめに

この度、医学教育振興財団が主催する英国大学医学部短期留学に参加させていただきましたのでご報告させていただきます。最初に申し上げますが、私は四国生まれ、四国育ちという生粋の日本人で、これが初めての海外留学でした。本プログラムに応募・参加するにあたってほとんど知識がなかった私は過去の先輩方の報告書に非常に助けられましたので、これから応募を考えている方、渡英が決まった皆様の一助になるように心がけて報告書を作成いたしました。

2.選考について

●きっかけ、応募理由

このプログラムを知ったのは3年生の時で、大学の掲示板で偶然存在を知りました。幼少期から英語に触れ、海外旅行や海外の音楽・文化が大好きで漠然と留学への憧れがあった私は、すぐに過去の先輩方の報告書を何冊か読み、とても貴重で素晴らしい体験ができることを確信し、応募を志しました。(ちなみにIELTSの存在を知ったのもその時が初めてでした。) 応募を考えてはいたものの、大学の勉強・部活・バイトと毎日忙しく過ごしなかな留学に対して本気で何かを取り組むことがないまま学年はどんどん上がっていきました。5年生になり部活のキャプテンとしての務めも終え、大学病院での臨床実習も始まりました。「自分のやりたいことは何なのか」と自分と向き合うようになってやはりこの留学プログラムに挑戦したいと思いました。海外経験が欲しいという気持ちはもちろんですが、自ら日本での臨床実習を経験して患者さんに対して問診や手技、ディスカッションなどもっと医療者として関わっていきたい、と感じていたのです。また今までやりたいことに対して努力し、挑戦するということを後回しにしてきた自分を変えたかったのもありました。

●IELTS 対策

書類選考の中で最も重要で、かつ大変なのがIELTSだと思います。他の派遣生の皆さんも書かれていると思いますがover all 7.0は最低限必要だと思いますので、私もそこを最低限クリアできるように勉強しました。ReadingはCambridge出版公式問題集でのみ対策を行いました。Speaking&Writingは自力での勉強には限界があると思い、Best Teacherという

オンラインの IELTS 対策講座を 1 ヶ月間受講しました。Writing の問題を Web で提出し、それに関して Skype を用いて Speaking の練習を行うという仕組みなのですが、比較的安価で両方のセクションの対策ができるのでおすすめです。また YouTube でも IELTS 対策動画はたくさんあるのでそれらを活用するのが良いと思います。これら以外に使用した教材は以下の通りです。

- Listening→YouTube で BBC News ・ TED
- Speaking→YouTube 「AcademicEnglishHelp」 channel
- Writing→新セルフスタディ IELTS 完全攻略 (the japan times 出版)

●面接

面接試験は東京都御茶ノ水で行われましたが、平日だったので実習を休んで参加しました。過去に英語で志望動機、臨床実習での興味深かった症例のプレゼンをしたとのことで、この二点に関しては事前に準備して行きました。面接が始まる前に部屋の前で待機するのですが、隣の受験者の方が話しかけてくれたのでリラックスして試験に臨めたと思います。面接では以下の質問を受けました。⑦の質問をされたときはとても驚いて頭が真っ白になりました。受験者によって質問内容は異なりますが、概ね提出した応募書類から質問されるので面接前には確認しておいたほうが良いとおもいます。

- ① 志望理由 (英語)
- ② 女性医師が結婚や出産を経て、どうすれば仕事を続けられるか (日本語)
- ③ どうして部活で成績が残せたか (日本語)
- ④ なぜ Newcastle を志望したのか (日本語)
- ⑤ 英語はどうやって上達したのか (日本語)
- ⑥ 愛媛大学の英語教育体制について (日本語)
- ⑦ 血圧、心拍の測定方法 (英語)

3.事務手続き、留学準備

事前に知っておきたかったことだけを抜粋して記します。年度によって異なることも多々あると思いますので、参考程度にさせていただけると嬉しいです。まずはおおまかな手続きの流れですが、10月末に Newcastle University (NCU) に Application form などの書類を提出し、およそ 1 ヶ月後に先方からの Offer letter を受け取り正式に留学できることが決定しました。一月にオンラインでの Health Questionnaire、Accommodation の申請と料金支払い、渡英までに Short Term Study VISA (以下 STSV) を取得するというのがおおまかな留学までの事務手続きです。

●Application form について

NCU への留学申請時に提出する書類は全部で 8 つありました。

- A copy of my current enhanced DBS certificate or police disclosure equivalent

各都道府県の警察署で発行される証明書です。平日の決まった時間帯にしか申請手続きができないので実習を休んでいく必要があります。20 分くらいで終わりますので、申請自体はそんなに面倒ではありませんでした。

・ **Medical Malpractice Certificate**

英文での医療過誤保険の証明書です。大学を通じて保険加入していると思いますが、保険会社に電話して発行をお願いしました。1 週間程度で届きました。

・ **My Curriculum Vitae**

英文で履歴書を作成します。規定されたテンプレートは無いので、ネットで拾ってきました。「英語 履歴書 テンプレート」などで検索すると簡単に見つけられると思います。

● **実習科について**

NCU では 4 週間の臨床実習のうち、前半は **Surgery** 又は **Respiratory Medicine** に、後半 2 週間は **Infectious Diseases** ・ **Obstetrics and Gynecology (OB/GYN)** ・ **Transplant Medicine/Transplant surgery** ・ **Oncology with some palliative care** ・ **Neurosurgery** ・ **Dermatology** ・ **Pediatric immunology/infectious disease** ・ **Hematology** のいずれか一つを選ぶことができます。私は前半 **Respiratory Medicine** に、後半は **OB/GYN** に配属されました。**OB/GYN** が将来目指している診療科であることに加え、平成 29 年度に派遣された石川先生の報告書を読んで、移民の多いイギリスならではの婦人科疾患、社会生活歴をもった女性の症例をみてみたいとの思いから希望しました。例年は私たちの **Supervisor** である **Dr.Price** がいらっしゃる **Infectious Diseases** が人気なようです。各科の様子は過去数年分の報告書に目を通してイメージしてみると良いのでは無いでしょうか。前半の 2 週間は 2 人ずつ同じ科に配属され、慣れない環境で助け合うことができるのでその点はとても良かったと思います。後半の実習では自分の力だめしの意味でもなるべく日本人同士がかぶらないように希望を出すのがいいのかな、と個人的には思いました。実習科が発表されたのは 2 月中旬ごろでした。

● **Health Questionnaire**

オンラインで行う健康調査です。本学では抗体証明書は日本語でしか発行できないので、自分で翻訳し先生のチェック、押印の上日本語原本に合わせて提出しました。C 型肝炎、HIV の検査についてですが、受けたことがないと申請すれば現地にて無料で受けられるように手配してくださるので、渡英前に追加で検査を受ける必要はありませんでした。

● **STSV について**

最も神経を使う作業でした。**STSV letter** が 12 月中旬に NCU から送られてきますので、そこから作業スタートです。基本的には **WEB** で質問に答えていただけなのですが、**Accommodation** の情報が 1 月中旬まで知らされず申請するのがギリギリになってしまいました。他には滞在するのに十分な資金があるか資金証明書の提出を求められる場合があります。滞在する地域によって必要な金額は異なるようですが、概ね 1 ヶ月 1015 ポンド程度

の残高があれば心配ないそうです。(ロンドンはもう少し必要なようですが。)ただ1ヶ月のみの短期滞在ですし、申請にあたり必要なかった方もいらっしゃるようなのでそこまで神経質にならなくてもいいかもしれません。VISA 申請に必要な書類は非常に曖昧にしか WEB サイトにも書かれていなかったのだからゆる書類を持って申請に挑みました。具体的には VISA 申請書類、パスポート、offer letter、IELTS 成績表、資金証明と通帳原本、滞在先が書かれた書類 (NCU が送付してくれます)、飛行機のバウチャー、在学証明 (以上全て英語) を持って行き全てを提出しました。申請と受け取りには大阪か東京の VISA センターに直接赴く必要があり、四国民としてはとても不便でした。さすがに2回も大阪に行くのは面倒なので、受け取りには VISA 配達サービスを利用しました。申請から VISA が下りるまで平均で10日、長くて3週間ほどだと思えます。私が申請したのは1月27日、出発は2月26日でしたから有料で優先的に申請を受けられるサービスを利用するかとても悩みました。VISA センターの方からももしかしたら間に合わないかも、と言われ不安が募りましたが断念。結果的になんと1週間後に無事パスポートが家に届きました。しかし何事も早めに行うのがベストですね、、、。

●留学準備

渡英までに耳を慣らしておこうと思い YouTube で BBC news などを聞くようにしていました。また現地の実習では問診や身体診察をしたいと思っていましたので、日本版 OSCE の復習に加えてイギリス流の身体診察について事前に目を通しておきました。大まかには日本と変わりませんが、ばち指や頸静脈脈怒張の確認など日本とは異なる点も少しずつあるので確認しておいたほうが良いと思います。過去の報告書にも記載のあった以下のサイトを利用しました。

- Geeky medics(<https://geekymedics.com>)
- OSCE stop(<https://oscestop.com/index.html>)

4.実習について

●Respiratory medicine

Consultant の Dr.Macfarlane が2週間のスケジュールを作成してくださっているので、基本的にはそれに従って行動します。しかし、自分のやりたいことがあれば何でもやっていいよ、と初日に言ってくださり2週目には消化器外科の実習にも参加させていただきました。

• ward round : consultant doctor についてまわり病棟回診を行います。毎回患者さんの病歴や検査所見を丁寧に教えてくださるので、知識の染み込み方が日本とは違いました。

• Team meeting : ランチョンミーティングのような形式で、週に一回 doctor たちも参加する lecture の時間がありました。「運動がもたらす効果」「緩和ケア」がテーマで、audience の参加しようという姿勢がみられとても盛り上がりあがりました。

• Outpatient clinic : 曜日ごとに扱う疾患が決められており Asthma ・ Interstitial Lung Disease (ILD) ・ Cystic fibrosis ・ Occupational ・ Tuberculosis (TB) ・ Pleural に分かれています。喘息

などの common なものはもちろん潜在性結核、アスベスト肺、鳥飼病などバラエティーに富んだ外来でとても勉強になりました。

・ X-ray meeting : hopper という病院間無料連絡バスで Royal Victoria Infirmary(RVI)から 30 分くらいのところにある Freeman Hospital で行われました。Doctor が経験した興味深い症例のプレゼンを聞くのですが、私たちのときはニトロフラトインによる薬剤性肺炎の症例でした。ニトロフラトインなんて初めて聞いた！と最初は不安でしたが聞いていて飽きることは全くありませんでした。(よく聞いていた TED のプレゼンを聴いているような感覚になりました。)

その他にもいくつかカンファレンスや講義(学生向けではない)にも参加させていただきました。こうして振り返ってみると自分で考え、行動し、分からないことは聞いて調べて勉強する、という active learning を大いに実践することができた 2 週間だったと思います。病棟では患者さんに問診、身体診察、presentation を希望すれば行えることは過去の報告書を読んで知っていたので、今回お願いしてやらせていただきました。日本でも行なっていることではあるのですが、正直私にできるのか不安でしかたなかったですし、やるかどうかとも迷ったぐらいです。しかし久永さんがいてくれたおかげもあって、何とかやり切ることができました。Presentation を Dr.Alice に行き、足りないところを指摘してくださったり、次にやる検査を私たちの報告をもとに考えたりと「診療に参加できていること」を実感できて胸がいっぱいでした。

●OB/GYN

非常に楽しみにしていたのですが、残念ながら 3 日間のみの実習となってしまいました。しかしこの二日間もとても貴重な時間を過ごすことができ、Delivery Suite と Newcastle Birthing Centre で実習させていただきました。帝王切開の手術に入ったりトラウベ聴診器を用いて胎児の心音を聞かせていただいたりしました。参考までに予定されていた OB/GYN

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
Week 1 AM	8-10 Induction - Education Rm, Chloe Barnes Delivery Suite (AP)	7-2 Newcastle Birthing Centre	9-12 TOP clinic, WHU	8-12 Gynae on call shadow, Ward 40	8-1 Elective CS list, delivery suite (AJ/LW)
Week 1 PM	Delivery Suite (AP)		1-5 Sexual Health clinic, Newcroft Centre	1.30-5 Gynae OPC, Clinic G, Level 1 NVW	1.30-5 ANC (AJ)
Week 2 AM	9-12.30 Colposcopy, WHU NVW	8.30-12 EPAC	8-12.30 Centre for Life (3 rd Floor) Oocyte collection (MP)	8-1 Gynae theatre, meet ward 40 (KB)	8.30-12.30 Rapid Access Clinic, WHU NVW
Week 2 PM	1.30-5 Obstetric USS, adjacent to ANC	1-5 Delivery Suite (SS)	1.30-5 ANC Preterm (AP)	1.30-5 Elective CS list, delivery suite (AJ)	1-5 Case presentations, SIS lecture theatre

でのスケジュールです。

5.生活について

週末は久永さんとハリーポッターのロケ地である Durham、電車で 30 分くらいの海辺の

街 Tynemouth に行きました。どちらもとってもおすすめです。是非行ってみてください。そして何よりも思い出に残っているのは3人全員で行った Edinburgh です。実は日本にいる時から Edinburgh にある世界最大級の病理標本博物館「Surgeon's Hall」にどうしても行きたくて2人を誘ってみたところ、快く来てくれました。博物館の中では大盛り上がり！果てしなく続く病理標本を見て感動が止まりませんでした。きっと家族旅行で行くような場所では無いと思いますので（笑）、これから NCU に派遣される方々の間で定番スポットになってくれると嬉しいなと密かに思っています。とにかくこのメンバーでよかったと心から思った週末になりました。他の日にはみんなで Newcastle のまちにショッピングに行ったり、ご飯を食べたりと、3人で行動することが多かったような気がします。こんなに仲良くなれると思っていなかったのが Newcastle に来ることができて本当に良かったです。

6.まとめ

海外経験の無い私は、渡英前不安しかありませんでした。英語は聞き取れるか、十分コミュニケーションは取れるのか、、、 Newcastle というまちはあたたかくて、優しさに溢れた最高の場所だったのです。いま留学を考えている方は、是非挑戦してみてください。それがどんな理由であっても、どんなに不安でもです！ちなみにバリバリやりたい、というよりもゆっくりいろんなことを教えてもらいながら実習したいというひとに Newcastle はぴったりだと思います。

出来るならこの街で最後まで実習をやり遂げたかったのですが、残念ながらコロナウイルスの影響で2週間と3日で終わることとなってしまいました。刻一刻と変化し、深刻になっていく状況の中で病院の緊張感が日々高まっていくところも肌で感じました。外来・入院患者はどんどん減り、doctor も電話対応に追われていました。このような状況の中、Supervisor であり感染症専門の Dr.Price に別れの日「勉強し、努力してください。このような事態に陥った時、次に闘い、救うのは君達なんだよ」という言葉をいただきました。初めて会った日とは比べ物にならないくらい疲弊した彼からのこの言葉は、鮮明に覚えています。きっとこの先も忘れることはないでしょう。医師になるということ、の責任の重さを最後に教えていただきました。と同時に、人と人とのつながりの大切さも痛感しました。病院が封鎖となり、帰国日まで寮で4日間ほど過ごしていたのですが、ある夜一通の手紙が部屋に届きました。同じ階に住む Elizabeth が食料はあるか、必要なものがあれば言ってほしいと。そして私たちの旅の安全を祈っているとのことでした。不安な状況の中でも相手を思いやることのできる彼女の強さと優しさに感動を覚え、この手紙は宝物になりました。日本からも家族、大学の先生、財団の方々からたくさんの連絡やサポートをしていただき、たくさんの方々に支えられて留学できているんだと感じました。異国の地で挑戦することで、自分が出来ることは意外とあり、逆に自分に足りないこと・できないことはそれよりももっとたくさんあることがわかりました。日本に帰ってからも出来ることはどんどん伸ばし、できないことは勉強しできるようにしていくことが留学させていただいたことへの恩返しだと思っています。

7.謝辞

このような素晴らしい機会を与えてくださった医学教育振興財団のスタッフの皆様、心より感謝申し上げます。また現地のスタッフの皆様、留学準備から帰国するまで温かく支えてくださった大学の先生方、本当にありがとうございました。一緒にたくさんの経験をした久永さん、平野君、そして家族にも感謝を伝えたいです。

今後どのような状況になるか先は見えませんが、一刻も早く事態が収束し、本プログラムを通じて皆様が安全に、そして実りある留学ができることを心よりお祈りしています。

経費

- ・ 日本ー英国間の航空運賃→16 万円
- ・ 寮費（宿泊費、朝夕飯付き）→9 万円
- ・ 通信費（tree 12GB、amazon で購入）→2500 円
- ・ 食費（土日、平日の昼食）→4 万円
- ・ ブリットレイルパス→2 万円

- ・ 旅行保険費→2 万円
- ・ VISA 取得費→2 万 6 千円

ニューキャッスル大学医学部短期臨床実習を終えて

順天堂大学医学部医学科 6年 久永 めぐみ

【はじめに】

今回私は公益財団法人医学教育振興財団(JMEF)のご支援のもとで、英国のニューキャッスル大学にて 12 日間短期臨床実習をさせて頂きました。今年度は COVID-19 の影響で、ニューキャッスル大学での臨床実習は例年とは異なる内容となりました。本来は 2020 年 3 月 2 日から 3 月 27 日までの 4 週間実習する予定でしたが、実習期間中に英国内で COVID-19 が急速に流行拡大したことにより、3 月 17 日の時点でニューキャッスル大学から実習中止の連絡を受けました。従来に比べて短い期間での臨床実習となりましたが、多くの方々に丁寧な指導して頂き、充実した学びを得ることが出来ました。

【応募理由】

私は地域医療、国際保健に興味があります。英国では General Practitioner (GP)制度があり、日本のかかりつけ医のような役割をしていること、身体診察所見を重視していることを知り、海外で要求されている身体診察の技術の水準を学びたいと思いこのプログラムに応募しました。

【出願準備】

私は医学部 5 年の春に大学にて JMEF 主催の「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」プログラムの募集が大学のメーリングリストを通してされていたため、応募をしました。このプログラムの選考は 1 次選抜(書類選考)と 2 次選考(面接試験)の 2 段階にわかれています。1 大学 2 名まで推薦できる為、順天堂大学では、1 次選抜の前に学内審査がありました。学内審査では、プログラムの一次選抜に必要な書類(応募用紙・履歴書一和文)を提出し、英語能力、学業成績等を考慮し、それをふまえて学内面接を行います。

1 次選抜では IELTS academic module の結果、履歴書や大学の成績表をもとに審査がおこなわれます。JMEF のホームページに詳細は記載されていますが、ニューキャッスル大学の応募に関しては、IELTS academic module において各分野(Listening, Reading, Writing, Speaking)及び総合評価(Overall Band Score)5.5 を必要とします。今回のニューキャッスル大学派遣生は全員 Overall Band Score 7.0 以上を満たしていました。順天堂大学の学内面接においても IELTS academic module の結果が大きなウエイトを占めるようです。このプログラム

への応募を考えている方は、IELTS の対策をすることをお勧めします。順天堂大学では、1月、2月に国際医学教育塾 IELTS コースが開講されており、私はこちらを受講しました。

1次選抜を通過すると、8月に2次面接試験が開催されます。私は志望動機を英語で、新専門医制度についてどう思うかと、結核の症状についてを、日本語で答えるよう求められました。

【留学準備】

面接試験合格の通知が8月下旬に通達され、2月までに書類準備を行います。JMEFの方がサポートをしてくださいますが、準備すべき書類は多く、時間と労力を必要とします。特に英文の犯罪経歴証明書、Short-term study visa (STSV)の取得は時間がかかります。STSVは英国の空港で必要書類を提出すれば取得することはできますが、派遣生は事前に日本で申請、取得することを推奨されています。日本語の書類を翻訳会社に依頼して、翻訳書類を作成する等、書類準備に時間がかかります。日本においてビザを申請する際、平日のみに営業しているビザ申請センターに行き、申請してからビザが手に入るまで優先ビザサービスを使用しない場合は、およそ3週間待つ必要があることを考慮したうえで、早めに準備をすることをお勧めします。

ニューキャッスル大学での選択希望調査メールが9月末に届きます。前半2週間は、SurgeryまたはRespiratory Medicine、後半2週間は以下の8科から希望する科を第一希望、第二希望まで提出し、2週間1科目まわることができます。(後半: Infectious Diseases, Obstetrics and Gynaecology, Transplant Medicine/Transplant Surgery, Oncology with some palliative care, Neurosurgery, Dermatology, Paediatric immunology/infectious disease, Haematology) また4週間の中で1日 General Practitioner(GP)の見学があります。

今回はCOVID-19の影響で「ニューキャッスル大学で臨床実習をする場合、日本で最後に病院実習をした日から2週間病院実習を行わない」という条件が必要になりました。そのため私は大学での病院実習を2週間欠席させていただいた上で、ニューキャッスル大学での実習を初日から参加させていただき運びとなりました。

【実習日程】

呼吸器内科実習を9日間、一般外科実習を1日、移植外科を2日間行いました。

【呼吸器内科実習】

9日間呼吸器内科にて実習を行いました。呼吸器内科は学生に2週間分のスケジュール表が配られて、そのスケジュールにそって行動します。基本的には朝の9時から始まるミーティングおよび病棟回診、午後の病棟回診、午前と午後にある外来のいずれかに参加する形で実習しました。朝のミーティングでは医師、看護師、薬剤師、などさまざまな医療従事者が集まり、夜間の病棟患者の申し送りをしていました。ミーティングが終わった後はConsultant(上級医)とRegistrar(研修医)で2~3人のチームになり、チームごとに割り当てら

れた患者の回診を行っていました。呼吸器内科を実習していた期間、私たちの指導医は Dr. Macfarlane で、病棟回診は基本的に Dr. Macfarlane のチームに同行していました。病棟では慢性閉塞性肺疾患(COPD)、肺炎、肺がん、喘息の患者さんが多かったです。Dr. Macfarlane は患者さん一人一人見ていく際にあらかじめ胸部レントゲン写真をみせ、学生の私たちにどういう疾患が考えられるかディスカッションをする時間を設けてくださいました。また、実際に COPD の患者さんの診察をする際に Hoover sign、Barrel chest はこれだよ、と身体診察所見も丁寧に教えてくださいました。一人一人の患者さんの問診、身体診察所見を丁寧にとっている姿がとても印象的でした。学生が病棟にいる患者さんの問診、身体診察所見を取ってきて、指導医に報告する課題もあり、喘息を疾患を持った患者さんを診察させて頂く機会も頂くことが出来ました。指導医の先生がいないなかでの問診、身体診察は緊張しましたが、患者さんは心よく接してくださり、良い経験になりました。

呼吸器内科外来は COPD 外来、喘息外来、間質性肺炎外来、嚢胞線維症外来、職業疾患外来、結核外来、一般呼吸器外来など疾患別に外来がされていました。COPD 外来では喫煙を続けている COPD の患者さんに対して禁煙を説得する際の話し方を、実際に見学して学ばせて頂きました。「このまま喫煙を続けると、だんだん活動できる領域がスーパーから家、家から部屋の中、と狭まってくる、と quantity より quality を重視して話すと効果的に伝えられる」という内容が印象的でした。喘息外来では、実際に喘息患者さんについてまわって、喘息患者さんが実際にどのような検査を受けるのかを見させて頂きました。スパイロメトリー、CO 拡散能力検査、理学療法士による呼吸方法のレクチャー、言語聴覚療法士による鼻咽頭ファイバー検査、そして医師による診察と、多職種で患者さんをケアしている様子を見ることが出来ました。呼吸器内科実習最終日には、Dr. Macfarlane の一般呼吸器外来の外来陪席をしました。ニューキャッスルはかつて造船・機械などの工業都市として盛んだったため、アスベストを使用したことによる石綿肺の患者さんが非常に多かったのが印象的でした。日本であまり石綿肺の患者さんを診る機会はなかったため、勉強になりました。

病棟回診をする際に、ニューキャッスル大学の医学部4年生と一緒にまわる機会がありました。ニューキャッスル大学医学部では2年生次から病棟で実習をすると知り、日本の医学部との違いに驚きました。日本の医学部はまずは知識を4年の前半頃まで集中していて、そこから臨床実習をはじめますが、早めの段階から病院実習を開始することで実際に現場でどういう知識が必要なのかを実感をもつことができ、モチベーション高く授業にも臨めるのではないかと思います。

【一般外科実習】

一日だけ他の派遣生の方と実習先の科を交換し、一般外科にて実習をさせて頂きました。一般外科では最初に、一般外科にいる病棟患者さんのミーティングがおこなわれ、管理、治療方針についてディスカッションをしていました。急性胆嚢炎、イレウス、盲腸癌など、日本でも見られる疾患が多かった印象を受けました。その後、病棟回診があり、腹部診察や

ストーマの確認などを行っていました。昼休みの時間に **teaching** という時間が設けられており、一般外科の先生が大腸癌の症状、検査、治療法などのレクチャーを同じ科の先生方に向けてしており、同席させて頂きました。午後は、**foundation doctor** の先生が病棟管理をするのに同行しました。一般外科にドイツからきた医学部6年の留学生の方がいらっしやり、その方に同行して採血や静脈路確保を彼女がするのを見学しました。日本で採血、静脈路確保を病棟ですることは一度もありませんでしたが、英国では医学生が病棟で行うのは普通のこと、その違いにも驚きました。また、ドイツ人留学生の方が、患者さんの腹痛の訴えに対して、触診、聴診を行い、金属音を聴取し、**foundation doctor** に自分がとった所見を報告したうえで何か別の対策をとった方がいいのではないかと自分の考えを述べており、自立して病棟業務を行っていることにも驚きました。英国留学をして感じたのは、基本先生方は学生が積極的に学びに来ることに寛容で、予め通達されていなかったとしても、どこの病棟でも、外来でも学生が見学にくるのを快く受け入れて下さるということです。また学生自身の積極性により、学べることも自由に広げていくことができるということも感じました。ドイツ人留学生の方との出会いは私にとって自分の考え方を広げる上で良いきっかけとなりました。

【移植外科実習】

英国内での **COVID-19** の流行に伴い、医学生が手術室に入ることが不可となってしまったため、移植外科では外来陪席と病棟回診に同行させて頂きました。移植外科は移植についてだけでなく、肝臓、胆嚢、膵臓に関する手術も取り扱っており、外来では膵臓癌、胆管炎、胆石、結腸癌など日本とあまり変わらない症例が多いように感じました。昼のミーティングでは病棟患者一人一人の概要、問題点を **foundation doctor** が伝え、それに対して **consultant doctor** がアドバイスをしていました。移植外科担当の指導医の先生が風邪で体調を崩し、両日ともに欠席だったことに加えて、手術室に入ることが出来なかったため、移植外科に関する事柄には触れることが出来ずに終わってしまいました。

【最後に】

2月中旬にニューキャッスル大学から、**COVID-19** の流行に伴う留学の指針がでて、「日本の病院施設に最後に滞在してから2週間、病院施設に出入りしないこと」を条件に英国留学が決定した際は、無事留学に行くことが出来ることに対して嬉しい反面、ヨーロッパ圏での **COVID-19** によるアジア人差別もニュースで取り上げられ、向こうで差別にあたりしないかと不安な気持ちもありました。しかし、ニューキャッスル大学の医師、医学生、患者の皆さんは親切に接してくださり、多くのことを教えてくださり、来てよかったと安心しました。

3月第1週目は英国での感染者は100人前後、死亡者も数人程度で、街でもレストランやお土産店も特に問題なく通常通り営業していました。しかし第2週目の後半になるにつれ、感染者数が1000人を越え、英国での **COVID-19** の流行が急速に拡大し始めました。ニュー

キャッスル大学においても第 3 週目の前半には医学生の病院実習が中止となり、私たちが宿泊していた寮でも集団感染を防ぐ目的で食堂がテイクアウトのみのサービス提供をするようになりました。休業するレストランも増え、スーパーではトイレットペーパーの買い占めが起こり、COVID-19 の影響を身近で感じるようになりました。緊急帰国が決定し、第 3 週の日曜日に帰国便に乗り、帰国し、日本政府の方針に従い 2 週間の自宅待機期間をもつようになりました。

この特殊な期間に留学をさせて頂き、ある意味貴重な経験をさせて頂くことができました。

このような例年とは異なる留学だったにも関わらず、多くの学びとかけがえのない経験を得ることが出来たのは、実習の受け入れ責任者として私たち派遣生を顧みてくださった Dr. Ashley Price や留学手続きのサポートおよび支援をしてくださった順天堂大学医学部長の服部信孝 先生、JMEF の皆様、順天堂大学学生課の皆様、そして共に楽しく、時には大変なことも一緒に乗り越えてくれたニューキャッスル大学派遣生の愛媛大学の古賀菜奈子さん、帝京大学の 平野零さんのおかげです。心より感謝申し上げます。

【現地で要した経費】

交通費：£ 50 (ニューキャッスル空港と大学寮との往復代など)

滞在費：£ 604 (1 か月の滞在費。寮での食事代込み)

食費：£ 150

実習費：£ 0

通信費：£ 30

ニューキャッスル大学医学部短期臨床実習を終えて

帝京大学医学部医学科 6年 平野 零

【はじめに】

私は、公益財団法人医学教育振興財団にご支援頂き、英国のニューキャッスル大学で 12 日間の短期臨床実習の機会を頂きました。今年度の実習はスケジュール通りの日程で開始されましたが、実習期間中に英国内で COVID-19 が急速に蔓延したことに伴い、ニューキャッスル大学から実習中止が告げられ、例年と比較し短い実習期間となりました。

以上の状況により実習は短期間ではあったものの、多くの先生方に熱心なご指導を頂き、充実した留学生活を送ることができました。本稿では、ニューキャッスル大学での 12 日間の臨床実習の内容および所見を報告します。

【応募理由】

私は将来、感染症内科医として国際的な分野で活躍する医師になりたいと考えています。そのためには、日本の医療機関で学ぶだけでは培うことのできない国際的な臨床的視点を持つことが求められます。このような知識技能が求められる点において、多民族・多文化主義である英国には、世界中から様々な人種や文化、社会的背景を持った人々が集まっており、こうした環境で臨床実習を行う事は、世界に通じる臨床能力を磨くことができるのではないかと思います、このプログラムへの応募を決めました。

【出願準備】

2019 年 3 月に帝京大学の掲示板でこの留学プログラムを知り、応募を決めました。留学プログラムの選考は、1 次選抜（書類選考）と 2 次選抜（面接試験）に分かれています。1 次選抜は履歴書や大学の成績表、IELTS academic module の結果などを基に審査が行われます。1 次選抜が選考のヤマであるとされており、とりわけ IELTS academic module の点数が求められ、今年のニューキャッスル大学派遣生は全員 overall band score 7.0 以上を満たしていました。そのため早期から IELTS 受験対策を行った方がよいと思います。私の場合、応募を決定してから 7 月の出願までの短期間で IELTS 対策を行いましたが、臨床実習や学内の試験勉強とこれを両立するのは大変でした。

2 次選抜は、日本語と英語の面接が行われます。志望動機や医学知識の試問など 10 分程度の面接が行なわれ、2019 年度の面接では志望動機と蛋白尿の鑑別について英語で質問されました。私は面接試験に臨むにあたり、大学図書館にあった過去 3 年分の医学教育振興財

団の派遣生の体験談を参考にしました。

【留学準備】

選考に合格すると渡英直前の 2 月までに多くの書類を用意する必要があります。書類の多くは医学教育振興財団の方がアドバイスを下さり、比較的スムーズに用意する事ができました。しかし、犯罪経歴証明書と英国ビザの 2 点の取得に時間がかかりました。

犯罪経歴証明書は、都道府県の警察本部で発行を依頼する必要があります。私は警視庁で申請を行いました。平日のみ申請可能であるため大学を欠席して警視庁に出向く必要がありました。英国ビザに関しては申請のために大量の書類を用意する必要があります。日本語の書類は翻訳会社に依頼して翻訳証明書を添付しなければならないという指示があり、用意に非常に時間がかかります。そのため、選考に合格した時点からビザの申請に必要な書類等を整理しておく方が良いと思います。

なお、ニューキャッスル大学は選択科目の希望調査があります。今年は前半 2 週間については一般外科又は呼吸器内科から選択でき、後半 2 週間は感染症科、産婦人科、移植外科、緩和ケア内科、脳神経外科、皮膚科、小児免疫感染症科、血液内科の 8 つの中から 1 つ選べるという形式でした。また、4 週間の間に 1 度、General Practitioner(GP)の見学の機会が与えられます。

【実習日程】

今年度は、一般外科実習を 8 日間、呼吸器内科実習を 1 日、GP 見学を 1 日、感染症内科実習を 2 日間行いました。

【ニューキャッスル大学と Royal Victoria Infirmary】

ニューキャッスル・アポン・タイン市は、イングランド北東部に位置する人口約 30 万人の地方都市です。ニューキャッスル大学は、ニューキャッスル・アポン・タイン市の中央に位置する公立の総合大学であり、1834 年の医学校の設立を起源とし、1963 年に総合大学として設立されました。そのため、ニューキャッスル大学医学部は長い歴史を持ち、医学分野に関して英国国内で高い評価を受けている学校の 1 つです。医学生の実習は主に教育病院である Royal Victoria Infirmary (RVI)で行われます。RVI はニューキャッスル大学の敷地内にある 673 床の 病床を持つ地域の基幹病院であり、三次医療機関としての役割を持ち、高度な医療を提供しています。

【一般外科・下部消化管外科実習】

8 日間の一般外科実習は、RVI で行われました。外科実習は毎朝 8 時の病棟回診から始まります。1 時間程度の時間をかけて Consultant や Registrar (上級医) の先生と Foundation Doctor (研修医) の先生で 3~4 人のチームを作り、病棟回診を行います。回診では腹部診察や、ストーマ状態の確認をしながら、患者さんの情報を収集します。回診後はその日に

行うべきタスクを Foundation Doctor の先生を中心に表にまとめる作業を行います。

外科実習 1 週目は病棟実習を行いました。毎朝、業務整理が終わると、Foundation Doctor の先生に同行して、静脈血採血や静脈路確保といった手技を経験させて頂きました。私の所属大学ではシミュレーション実習を含めて数えるほどしか静脈血採血を行う機会がなく、静脈路確保に至っては全く経験がありませんでした。しかし、外科病棟実習中に何度も採血や静脈路確保に挑戦する機会が与えられ、最終的に倉庫にて採血や静脈路確保に必要な道具を自分で用意するところから、採血後に検体を検査室に提出するまでの全過程をこなせるようになりました。病棟実習中にニューキャッスル大学の医学部 5 年生と会う機会が何度かありましたが、彼らは医師の監督を必要とせず、卒なく静脈血採血や静脈路確保を行っており、その姿を見て感心させられました。

外科実習の 2 週目は手術見学を主に行いました。とりわけ今回は、腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術、腹腔鏡下右半結腸切除術、乳腺腫瘍摘出術を見学する機会を頂きました。これらの手術では全て術野に入り、腹腔鏡のカメラ持ちや鉤引きなどの手術助手を行いました。手術自体は日本の病院で見られる手術とあまり変わらない印象を受けましたが、英国の手術室での衛生管理は主に 2 つの点で日本の病院の手術室と大きく異なることに気が付きました。

第 1 点は、マスクの着用ルールの違いです。日本では手術室に入室する前に、サージカルマスクを着用する規則である所がほとんどだと思います。一方で、英国では術野に入る医師や看護師だけがマスクを着用すればよいという決まりだそうです。そのため、術野に入らない麻酔科医や外回りの看護師はオペ室内にいてもマスクを着用する必要がなく、その姿を見て衝撃を受けました。

第 2 点は、手術室に入る前に手洗いをする際の環境です。日本の手術室の多くは手洗いを終えた後に蛇口を捻ることで手や腕が不潔にならないように、蛇口が自動化されていることが多いと思います。ところが RVI の手術室では手術室の水栓が手動であり、手洗いを終えた後に自分の肘で蛇口を閉める必要があります。このように、英国での手術室内の衛生管理は厳格でないという印象を受けました。手術室内の衛生管理が緩やかな一方で、RVI の病棟では感染防止のため白衣の着用を認めていませんでした。日本の大学病院では医師や医学生は白衣を着て医療行為を行う事が認められていると話す、RVI の先生方や学生は驚いていました。国が違えば、そこで要求される衛生基準や感染対策ルールは異なるのだと感じることができました。

【呼吸器内科実習】

他の派遣生の方と実習科を交換して、1 日ですが呼吸器内科実習を行いました。実習では、COVID-19 についての講義や肺癌症例カンファレンスに参加して有意義な時間を過ごしましたが、嚢胞線維症 (CF) 外来を見学したことが一番印象に残りました。CF の患者さんは診察室の中で待ち看護師、呼吸理学療法士、栄養士、医師が診察室を順番に訪れて診察や処置を行っていました。看護師は CV ポートの管理や喀痰培養、体重測定を行い、呼吸理学療法士は呼吸機能検査、栄養士は食事状況についての問診などを行っていました。私が

診た CF の患者さんは、膵機能不全による糖尿病や難病であるためにうつ病になるなど多くの問題を抱えており、CF の患者さんの管理が大変複雑であると認識できました。また、CFTR 遺伝子の $\Delta 508$ 変異についてや ivacaftor、tezacaftor といった最新の疾患修飾薬についても学ぶことができました。

【感染症科実習】

今回は、2 日間の感染症実習を行いました。COVID-19 の影響により外来予約の多くがキャンセルになっていたため、限られた症例しか見ることができませんでしたが、興味深い症例を外来時にいくつか見学することができました。とりわけ HIV/AIDS、原因不明の E 型肝炎、北米に渡航歴のある *Blastomyces dermatitidis* による骨髄炎など、日本ではあまり見ることのできない症例にふれることができ、貴重な経験を得ることができました。

HIV 陽性者の診察では特に多くの事を学びました。その 1 つは英国では特定の HIV 薬投与時に副作用を避けるためにスクリーニング試験を行わなくてはならないという事です。アバカビルは抗 HIV 薬の 1 つですが、HLA-B*57:01 陽性者に対してこれを投薬した場合、アバカビル過敏症をきたす恐れがあるという事を学びました。HLA-B*57:01 の遺伝子頻度は英国と日本で大きく異なり、コーカソイドの多い英国では 5~8%程度であるのに対して、日本では 0.005%程度であると報告されています。従って、英国でアバカビルの投与を検討する際は HLA-B*57:01 に対するスクリーニング検査が行われていますが、日本では HLA-B*57:01 の遺伝子頻度が低いためスクリーニングが行われていないという違いを学ぶことができました。

【GP 見学】

Benfield Park Medical Group に所属している、Dr. Tom Coulthard の外来を 1 日見学しました。Benfield Park Medical Group の診療所は、RVI と同じく国民保健サービス(NHS)に基づく医療サービスを提供しており、年間 1 万人の患者を受け持ち、1 日に約 30 人程度の患者さんが来院します。GP は疾患の分野に関わらず、患者の初診を行い可能な場合は GP が診断や治療を行います。専門的な介入が必要であると判断された場合のみ、RVI のような専門病院に患者を紹介します。このように GP はゲートキーパーとしての重要な役割を担っています。

私が外来を見学した際は、糖尿病や高血圧といった慢性疾患、COPD や喘息といった呼吸器疾患、肩関節周囲炎や肩インピンジメント症候群といった整形外科疾患、白癬や日光角化症といった皮膚疾患に加えて小児の夜尿症や若年者の薬物中毒者の抗精神病薬の服薬調整まで多くの疾患を取り扱っていました。その際に NHS に基づく医療システムで特に優れていると感じた点が 2 つあります。

第 1 点は、NHS では患者情報が共通の電子カルテシステムで共有されているという事です。これにより引っ越しなどの理由でかかりつけ医が変更となった場合においても、以前の患者情報を簡単に把握することができます。日本の病院では病院毎に電子カルテシステム

が構築されており、例え同じ系列病院であっても患者情報が共有されない事が多くあるので、このシステムを知って感心しました。

第2点は、NHSのシステムでは患者の疾患情報を統計化して管理しているという点です。これにより受け持ち患者における特定の疾患の管理の達成度が数値化されて記録に残ります。例えば、受け持ち患者のうち COPD 患者のインフルエンザワクチン未接種者や若年女性の子宮頸がん検診の未受診者が何パーセントいるか、などを把握することができます。治療や処置を受けていない患者さんはリスト化されており、受診を促すために E メールでの通知も容易に行うことができます。

1日という短い時間でしたが、日本と比較して英国の医療システムを学ぶことができました。

【COVID-19】

2週間の滞在期間中に、RVI内の様子や英国の社会情勢は劇的に変動しました。渡英直前の2月中旬の時点では、クルーズ船のダイヤモンドプリンセス号における船内感染がニュースとして取り上げられており、日本国内では武漢からの帰国者を始めとして感染者の増加が懸念されていました。一方、当時の英国では全英での感染者数は10人程度であり、死亡者の報告もありませんでした。渡英直後は、現地の先生方や学生には日本でのCOVID-19の感染状況を心配される事も多く、日本での感染対策など多くの質問を受けました。

3月の第2週前半頃までは、COVID-19の影響を特に感じることはありませんでした。街に出てもスーパーマーケットやレストランは通常通り営業しており、道を歩いている人でマスクをしている人々はほとんどいませんでした。

しかし、3月の第2週後半から急展開を迎えました。この頃から急激に英国内での感染者数や死亡者数の増加が報告され始めました。英国の Boris Johnson 首相は当初、集団免疫戦略に基づく政策を発表しましたが、数日後にはこれが撤回され封じ込めを含む強硬な政策を検討するなど、急な方針転換により混沌とした情勢の中、第3週目にはRVIでは外来患者の予約の調整を行い、患者数を減らしていました。このため病院内で見かける患者さんの数が少なくなったのが印象的でした。街を歩いても多くの人がマスクを着けて歩くようになり、店の一部も営業の取りやめが始まりました。食料品や日用品の一部は買い占めが始まり、この事はニュースでも取り上げられるようになりました。最終的に英国から帰国する際には感染者数が約4000人、死亡者数も約170人程度になっていました。

【最後に】

例年より短い期間ではありましたが、非常に充実した時間を過ごす事ができました。渡英前から医学英語を勉強していましたが、特に地元の患者さんが話す Geordie と呼ばれるニューキャッスル地方のアクセントは英国の中でも特に独特であることで知られており、これを聞き取るのに苦労しました。英語がわからず苦労した事もありますが、ニューキャッスル大学の教育プログラムは非常に実践的であり、多くの事を学ばせて頂きました。

COVID-19 が蔓延する中、実習の受け入れ責任者として今回の留学でお世話になった Dr. Ashley Price や帝京大学医学部医学教育センターの先生方及び事務部の皆様、ニューキャッスル大学派遣生の愛媛大学の古賀菜奈子さん、順天堂大学の久永めぐみさんにこの場を借りて御礼申し上げます。

【現地で要した経費】

交通費：£ 50、(ニューキャッスル空港⇄大学寮など)、滞在費：£ 604 (1 か月間の滞在費。寮での食費を含む)、食費：£ 200、実習費：£ 0、通信費：£ 250

ロンドン大学セントジョージ校医学部

St George's, University of London

◇群馬大学 西岡凜太郎 (2020.03.16～2020.03.20)

◇京都府立医科大学 須賀 友子 (2020.03.02～2020.03.16)

St George's, University of London 臨床実習報告書

群馬大学医学部医学科 6年 西岡 凜太郎

【はじめに】

この度、ロンドン大学セントジョージ校 (St George's, University of London ; 以下 SGUL) の麻酔科 (Anaesthetics) にて臨床実習をする機会を頂きました。2019 年末頃より世界中で流行していた新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響で、当初の予定であった 4 週間 (2020 年 3 月 2 日～3 月 27 日) より大幅に短い 1 週間 (3 月 16 日～3 月 20 日) の実習となってしまいましたが、短期間ながら大変貴重な経験をさせて頂きましたので、ここにご報告致します。

【応募】

○志望動機

今回の「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」の存在を知ったのは、1 年次の終わり頃でした。将来、国際的に活躍できる医師を目指していく上で、在学中に何らかの形で海外留学が出来ればと漠然と考えていたところ、大学の先輩が書かれた本留学についての体験談を目にしました。そこには、「丁寧な病歴聴取と身体診察により可能な限り情報を収集し、得られた情報に基づいて疾患を特定し治療を行う、という一連の臨床推論プロセスに重点を置いている」「学生のうちから他の医療スタッフと共に、主体的に診察・診断・治療に参加できる」といった、英国の医学教育・医療制度の様々な優れた特徴について説明されていました。英語圏で臨床実習をすることがいかに有意義で得難い経験であるかを強く認識し、そのあまりの魅力に、自分もこのプログラムに挑戦しようと直ぐに決意しました。以来、英語力の維持・向上のため、国際医療ボランティアサークルや医療英会話サークルに定期的に参加したり、USMLE の勉強に励んだり、より実践的な医療英語に常に触れるよう努めてきました。

○IELTS

IELTS は、2019 年 3 月 2 日 (4 年次) と 6 月 1 日 (5 年次) の 2 回受験しました。1 回目は Listening 9.0/ Reading 8.5/ Writing 6.5/ Speaking 7.0/ Overall 8.0 でしたが、各分野で 7.0 を必要とするいくつかの大学の基準を Writing だけ満たしていなかったため、もう一度受験することにしました。しかし、残念ながら 2 回目の受験では 1 回目よりもスコアが下がってしまい、再度受験する時間的・経済的余裕も無かったので、上記スコアで応募することとなり

ました。

○学内選考

5月31日までに留学プログラム参加申込書と志願書を提出後、3人の先生による面接が実施されました。面接では志望動機や抱負等について質問されたほか、実際に英語での問診も行いました。なお選考通過後に伺ったところ、本学からの応募希望者は2名だったようです。

○書類選考・面接試験

応募書類（応募用紙、履歴書、成績証明書、推薦書、健康証明書、IELTS成績証明書）を揃えた上で7月26日までに医学教育振興財団（以下財団）宛に送付しました。8月9日には書類選考の合格通知を受け取り、8月26日に御茶ノ水で面接試験が行われました。面接では7人の面接官がコの字型に着席しており、順番に質問に答えていく形式でした。内容はおおよそ以下の通りで、日本語で訊かれた場合は日本語で、英語で訊かれた場合は英語で答えるように指示があります。合格通知は3日後の8月29日に大学を通じて受け取りました。

- ・ Please introduce yourself. ・ Please tell me why you applied to this programme.
 - ・ 今回イギリスに行くことでどのように日本の医療を変えていけるとおもいますか。
 - ・ 群馬大学のいい所を出来るだけ挙げてください。
 - ・ MD-PhD コースに入っていますが、将来は基礎研究をやりたいのですか。
 - ・ 「現在、臨床実習で血液内科を回っている」と直前に発言
- You said you liked hematology. Please tell me the symptoms of acute myeloma.

【渡英準備】

○SGUL 提出書類

9月20日に財団より提出書類やビザ申請、その他必要事項（実習費、宿舍、補助金等）に関する資料を受領し、準備を開始しました。本年度のSGULへの提出書類は以下①～⑦でした。

- ① Medical elective application form : 財団からのメールに添付された form に個人情報やIELTSの成績、希望実習期間・診療科、宿舍使用の有無等について記入します。
- ② Current photographic identification and any relevant visa pages : パスポートの写真・個人情報のページをカラー印刷します。パスポートは取得に1週間以上掛かるため、未取得の場合は早めに申請しておきましょう。「④ Home country police check」の発行にも必要です。
- ③ Academic reference letter : 学長または医学部長が作成した英文の推薦状（現役の医学部5年生であること、学部課程の期間を明記。人物の人柄・人格等に関する記述は不要）です。

- ④Home country police check : 英文の犯罪経歴証明書（無犯罪証明書）で、住民票のある都道府県の警視庁・警察本部に申請します。ただし、警察は基本的に平日の限られた時間帯しか受付しておらず、指紋採取のため本人が出向く必要があり、発行まで2週間程度掛かることなどから、大学の講義や病院実習との兼ね合いには注意しましょう。
- ⑤Evidence of English language proficiency : IELTS 成績証明書をカラーでスキャンします。
- ⑥Occupational health forms : 9枚に亘る form に健康状態やワクチン接種歴を記入します。ワクチン接種や抗体価測定等が不十分である場合、追加の接種・検査が必要となります。
- ⑦Occupational health forms 添付書類 : 「⑥Occupational health forms」の検査結果に、自身で英訳をつけるか、内容を一枚の文書に英語でまとめて添付します（後者の場合は医師の手書きの署名・押印が必要）。母子手帳等の証拠書類も要るので、事前に取り寄せましょう。

上記のうち、①③⑤は9月30日まで、⑥⑦は10月11日までに原案（手書きの署名等を入れる前段階）を財団に一旦提出し、内容を確認して頂きました。財団から確認済みの連絡後、②③は大学に依頼して公印（学長 or 学部長 or 学部印）の押印、⑥⑦は医師による手書きの署名や公印の押印が必要となります。作成が終わり次第、すべての書類をスキャンしてPDF化し、圧縮フォルダーにして10月18日までにSGULのOH forms 担当者宛に送付しました。

○ビザ申請

本年度は Short-term student visa（以下 STSV）を取得しました（ビザの種類は変更される場合があるため注意）。10月24日にSGULより Provisional offer letter を受信し、記載の指示に従って Elective fee（£300）を5日以内に支払うことで実習が確定されました。その後、12月2日に Short-term study visa letter を受け取り、ビザ取得に必要な書類を揃え始めました。今回のビザ申請で揃えた書類は以下①～⑥でした（UK Visas & Immigration Checklist より抜粋）。

- ①The passport or travel document for (氏名) from Japan : 有効期限内のパスポートの原本。
申請中はパスポートが返却されませんので、海外旅行や留学の時期には気を付けましょう。
- ②Information about your visit (Documents showing any plans you have made, such as: tour details/ flight details/ letter of invitation/ evidence of sponsor's immigration status in the UK) : 往復航空券（控えもOK）。11月26日に購入し、そのeチケットお客様控えを提出しました。
- ③Proof of current studies (Evidence of being in education) : 各種留学ブログには必要との記載はありませんでしたが、取得が容易なので念のため在学証明書（英語）を提出しました。
- ④Money - either income or savings (Documents such as: Bank statements/ bank books/ bank letter/ balance certificate/ tax returns/ crop receipts) (Documents showing that another person can pay for your visit, such as: Bank statements of the person paying for your visit) : 留学の資金証明書類です。今回は、(1)財団からの補助金の証明書類 と (2)父親の給与明細・賞与明細

(及びその英訳)の二種類を提出しました。(1)は、財団に発行依頼をすれば直ぐに作成し送って頂けます。しかし(2)については時間と費用が掛かる場合があるため注意を要します。

基本的には、滞在費用※を十分に賄えるだけの資金が最低 28 日間継続して入っている銀行口座の、通帳のページや取引証明書(とその英翻訳)が用意できれば問題ありません(残高証明書は不可)。端から英語の書類を作成してくれる銀行はそれを提出すればいいですが、日本語の書類しか発行してくれない銀行については翻訳会社に依頼する必要がありますので、余裕をもって準備しましょう(申請者本人の翻訳は無効)。また、残高不足や銀行の営業日の関係等、何らかの理由で上記書類が用意できない場合も、今回のように給与明細・賞与明細や領収書などで十分な資金を証明できれば大丈夫です。

※ロンドンの場合、月£1265(レートにも拠りますが20万円弱)で計算するようです。

⑤Additional Information (Evidence of family members remaining in your home country whilst you travel): 親や親族等の口座より留学資金を証明する場合は、英語のサポートレター(同意書)と、家族関係を表すための戸籍謄本(とその英翻訳)が必要です。「④Money (either income or savings)」で翻訳会社に依頼する場合は、同時に依頼するとスムーズです。

⑥About your Course (Documents giving proof of the course you are studying, as stated in the application form, such as a letter of acceptance from the educational institution on official headed paper, stating the course's name and duration) (Documents showing the cost of your course) (Documents showing the cost of your accommodation during your study): SGUL からの入学許可や留学費用については、STSV letter に記載されています。宿舍費用については、宿舍予約を完了すると送られてくる Contract schedule を提出すれば問題ありません。

申請の流れは、オンライン申請(12月10日)→申請日予約(1月9日)→申請センター訪問(1月13日)→ビザ返送(1月22日)でした。申請書類はオンライン申請時にアップロードしますが、(揃わない場合等)当日持参しその場でスキャンするサービスも利用できます。

○宿舍予約

SGULの宿舍(Horton Halls)は、(9月20日時点で)既に財団を通じて4名分の仮予約が為されています。実習確定後、11月6日にSGULの宿舍担当者より予約方法に関するメールを受信し、直ぐに専用サイトへの登録と本予約を行いました。なお本予約の際の注意点ですが、例えば3月1日~3月29日朝の28泊したい場合、Start Dateは3月1日、End Dateは3月29日としましょう(3月28日とした場合、3月28日の夜は含まれません)。

費用については、本年度は room rental (£168/週×4週間)+bedding fee (£35)=£707でした。支払い方法は基本的にクレジット/デビットカードでの現地精算のみとなりますが、場合によっては銀行振込やオンライン振込も可能なようです。今回は先方の都合により現地で支払うことが出来なかったため、日本帰国後にオンラインで支払いを完了させました。

○渡英まで

正直に言いますと、今回の留学ではこの期間が最もハードでした。先述の通り、1月22日にはビザ取得を完了し、現地での宿舎や航空券等もすべて手配済みでしたので、順調にいけばあとは荷造りをして2月29日に渡英するだけ……のはずでした。しかし留学を目前に控え、例の新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）がまだそれほど欧州に波及していなかった時分、感染が徐々に拡大し始めていた地域からの渡英は、次第に困難を極めていきました。

2月12日、英国政府より医療従事者に関するあるガイドラインが発表されます。そのガイドラインは、「日本を含むアジア諸国から英国への入国者は、14日間臨床現場から離れなければならない」というものでした。これを受けて、本プログラムを通じて3月に予定されていた臨床実習の実施は、各大学の判断に委ねられることになります。2月12日にはNewcastle大学、2月13日にはGlasgow大学より相次いで実習の延期・中止の通知が届き、2月14日にはOxford大学からも直近14日間の動向調査（日本国内で病院実習に参加していたか等）が送られてきました。しかしSGULからは数日経っても連絡がなく、実習が延期になるか中止になるか、予定を早めて事前に英国入りするべきか否か、日本での実習を中断し臨床現場から14日間離れるべきかどうか、非常に判断が難しい状況でした。

結局、渡英9日前の2月20日になって漸く、SGULより「実習前に14日間の隔離が必要となる。留学の中止を提案する」という旨のメールを受信しました。ただ、「14日間」とは（他大学と同様に）“日本国内での医療機関で患者との接触後14日間”なのか“日本出国後14日間”なのか、「隔離（strict quarantine period）」とは具体的にどういう扱いを受けるのか、隔離期間中に宿舎は利用できるのかそれとも自分で宿泊施設を探す必要があるのか、など不明点が多く、そうした点について問い合わせのメールをしました。しかし再びしばらく音信不通となり、続報が届いたのはその6日後の2月26日でした。「改めて実習中止を強く提案する。もしそれでも実習を希望する場合、英国入国後14日間の自己隔離が必要となる。隔離期間中の宿舎利用は不可。必ず24時間以内に如何にするか返信せよ」と。渡英3日前の夜の出来事です。

長らく記載してきました通り、この段階に至るまでに大変な労力と時間とお金をかけて留学の準備をしてきましたから、どうしても本留学を諦め切れず、渡英してから一転実習中止になったり長期間帰国できなくなったりする可能性も覚悟しつつ、英国入りする決心をしました。結果、各方面に多大なるご迷惑とご心配をお掛けしながらも何とか予定通りの飛行機で渡英し、空港での厳戒態勢の検疫も辛うじて潜り抜け、無事に英国入りすることが叶いました。

【現地での実習】

○実習開始まで

St George's Hospital での実習は、ロンドン市内のホテルでの自己隔離期間（16日間）終了後の月曜日（3月16日）より開始される手筈となりました。初日の朝、メールでの指示通りに抗体価検査を終えて大学受付に向かい、学生登録をして学生証を受け取る……はずで

した。しかし、惜しくも COVID-19 の影響で、大学全体が直前の金曜日（3月13日）から臨時休校。Wi-fi 環境や図書館・コンピュータ室の使用、学内・院内のあらゆるドアの開閉に必要な学生証を受け取れないまま、予め知らされていた集合場所へと向かいました。

待ち合わせ場所であった **cardiothoracic theatre** に到着後、訝しがられながらも鍵を開けてもらい中に入ると、実習前よりメールでやり取りしていた **supervisor** の **Dr. Jens Bolten** に会い、今後のスケジュールや実習内容について話し合う……はずでした。しかし、何故かそこに **Dr. Bolten** の姿はなく、恐る恐る尋ねてみたところ「昨日までは普通に出勤していたが、体調を崩し今日から休んでいる」とのこと。まさか COVID-19 では、、という心配をしつつ、まだ実習について何も決まっていないことに気付き途方に暮れていると、「とりあえず麻酔科の事務室へ行ってみては？」と提案して頂きました。

案内に従い事務室を訪れて事情を説明すると、スタッフのご厚意で、偶然その場に居合わせた **Dr. Vivek Sharma** にご指導頂けることに。**Dr. Sharma** は **Dr. Bolten** と同じく **cardiothoracic anaesthesia** をご専門にされている **consultant anaesthetist** ということで、(かなり回り道はしたものの) 晴れて **cardiothoracic theatre** で実習を開始できることになったのは勿怪の幸いでした。

○麻酔科実習

実習内容は、主に手術見学でした。COVID-19 の蔓延による ICU 病床の需要増加に備え、術後に ICU に入る必要があるような大手術（心臓、大血管等）はすべて中止または延期され、**cardiothoracic theatre** で行われていたのは1日あたり2-3件の小手術（気道、肺等）のみ。午前と午後にそれぞれ1件ずつ、気胸や肺癌の胸腔鏡下肺部分切除術等を見学するといった感じで、5日間で計10件の手術に入ることが出来ました。

ただ、院内の SARS-CoV-2 のインパクトは想像を遥かに超えて大きなものでした。COVID-19 への曝露歴のある患者の手術の際、関係する医療スタッフが総出で緊急ミーティングを開く姿を何度も目にしました。病室からの運搬経路はどうするのか。手術器具は何が使えるのか。誰が執刀するのか。感染防護具の数はいくつあるのか。誰が入室して誰が介助するのか。院内の指針の策定が追いつかず、完全に現場の医師や看護師たちに判断が丸投げされたその状況は、もはや「綿密で用意周到な準備」ではなく「無秩序で無統制な混沌」でした。多くの医療スタッフが COVID-19 の対応に駆り出されたり自宅隔離となったりするなど圧倒的に人員が不足する中、限られた感染防護具や医療器具をどのようにして上手く遣り繰りするのか。暗中模索して見えない敵と戦う最前線は、まさに野戦病院と化していたのです。

○英国の麻酔科の特徴

英国の手術室には、**Anaesthetic room** と呼ばれる独特な部屋が併設されています。術前の患者はまずこの部屋に運ばれ、本人確認や術前問診の後に麻酔をかけられます。その後モニターや酸素が一旦取り外され、手術室に運ばれ手術台に移乗させられてから、改めて麻酔器

やモニターに繋がれるという仕組みです。

○突然の実習中止

実習を漸く開始した丁度その日、英国のジョンソン首相は COVID-19 に関する記者会見の中で、感染拡大防止のため数日以内に踏み込んだ措置を取ることを宣言しました。その2日後の3月18日には、日本政府より「水際対策に係る新たな措置」が発表されます。「英国から日本への入国者については、日本時間3月21日午前0時以降に日本に向けて出発した飛行機を利用した場合、検疫強化の対象となる。」事実上の入国制限ともなりうる措置でした。

この頃、既にヨーロッパではイタリア・スペインを中心として爆発的に感染が広がっており、英国国内でも続々と感染者の入院や死亡事例が報告されていました。事態は日に日に悪化し、いつどのような措置が取られてもおかしくない状況となっていました。そんな中、3月19日には、実習を行っていた *cardiothoracic theatre* のすぐ上の病棟で COVID-19 の患者が70人に達したこと、すぐにでも帰国した方が良いということを告げられます。こうした展開になることは覚悟していましたが、さすがにこれ以上病院のご厚意に甘えて診療業務の妨げになってはいけないと強く自覚し、帰国を決意しました。家族や Dr. Sharma とも相談し、金曜日で実習を切り上げて翌土曜日（3月21日）には帰国の途に就くことになりました。

最終日には多くの医療スタッフから、「無事に日本に帰れますように」「この難局を共に乗り越えよう」「良い医師になってまたいつでも帰っておいで」など、大変心温まる激励の言葉の数々を頂きました。必ずや立派な医師にならねばという身の引き締まる思いと共に、得も言われぬ寂しさや深い感謝の念で心が溢れ、胸が一杯になったことは今なお鮮烈に覚えています。

【おわりに】

COVID-19 の世界的大流行という極めて特異で困難な状況の中、本留学の実現に向けてご尽力頂いたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。この経験をもとに、より一層医師として成長するべく精進していく所存です。今後とも何卒よろしくお願い致します。

【費用】 交通費£200、ホテル滞在費£800、宿舍費£150、食費£400、実習費£300、通信費£30

St George's Hospital 臨床実習報告書

京都府立医科大学医学部医学科 6年 須賀 友子

【1. はじめに】

この度、医学教育振興財団 (JMEF) のご支援の下、ロンドン大学セントジョージ校 (SGUL) の腎臓内科において臨床実習を行う機会を頂きました。世界的な COVID-19 流行の渦中での留学であったため、例年と異なる部分も多々ありますが、この報告書が今後応募される方の参考になれば幸いです。

【2. 応募まで】

応募の経緯

以前、京都大学農学部に通っていた際、英国 Sheffield 大学に交換留学生として派遣していただきました。好きな科目を履修してよかったため、前々から興味を持っていた医学を学んでみることにしました。留学では、医学の楽しさに触れると同時に、英国の自然や文化、British English のアクセントに魅了されてしまいました。帰国後にこのプログラムのことを知り、翌年京都府立医大の医学生となってからは、JMEF の派遣生として英国に再び戻って臨床現場で学ぶことを夢見ながら、応募の時を待ち侘びていました。

IELTS

OSCE 後から実習開始前までの 1 ヶ月ほどの休みを利用して短期集中で対策し 4 回生の 1 月に受験しました。結果は、後輩の方々の参考になるよう記載しますが、L7.5 R8.0 W6.5 S7.5 OA7.5 でした。その後もただだと対策を続けながら 2 度受験しましたが、結局集中して対策した初回の結果がベストでした。Writing は最も点が取りにくいと言われていたので、頑張らなければと思ってはいましたが、言い訳を重ね、結局実践練習することなく受験してしまいました。今思うと教室に通うなどして向き合わざるを得ない環境を作った方が良かったと思っています。留学可能時期と自分のスコアからして、志望先は Newcastle 大学と SGUL の 2 択から選ぶことになりました。1 つの科でじっくりと、そして他に派遣生がおらず甘えられない環境で実習に励みたかったので過去の報告書を参考にして SGUL を志望しました。

【3. 面接試験】

2019 年度は 8 月 26 日(月)に、御茶ノ水にあるガーデンパレスホテルにて行われました。面接室にはスーツケースを含む荷物全てを持って入るように指示されました。面接官は、JMEF ホームページに記載されていた選考委員会の先生方でした。距離が近く、人数も多かったので緊張しました。面接時間は入退室を含めて 8 分で、1 つの質問に大体 1 分以内で答えるように指示されました。私が質問されたことは次の通りです。志望した理由 (英語)。履歴書に関する質問 (日本語)。応募書類に関する質問 (日本語) 2 問。最近どの診療科をローテーションしたか? (英語) → (消化器内科) → 胃潰瘍の症状は? (英語)、胃潰瘍の検査は? (英語)。面接の手応えは全くなく、特に英語の質問に関しては今思い返しても恥ずかしくなるほど稚拙な返答をしてしまいました。ただ、志望理由については声に出して何度も練習した甲斐あり、自信を持ってスムーズに言えたのでそこは良かったと思っていました。SGUL への派遣が決まったと通知を受けたのは面接からわずか 4 日後のことで、5 年越しの夢が叶い喜びはひとしおでした。

【4. 実習前】

しかし、出国を 2 週間後に控えた 2 月 14 日(金)、Glasgow 大学では受け入れ中止、Newcastle 大学では 2 週間の待機期間を経てから実習開始になったと JMEF から連絡を受けました。当時、アジアが COVID-19 の中心地となっていたことを受けての措置でした。SGUL からはまだ連絡は来ていませんでしたが、状況を考えて似たような対応が取られると考えられました。しかし、応募のために費やした労力や派遣生に選ばれたときの喜びを思うと、何もせずに連絡を待つことはできませんでした。留学開始まで 2 週間ある今入国してしまえば、仮に中止と言われても交渉の余地が残るのではないかと。そう考え、指導医や学生部長と急いで連絡を取り、行っていた実習の中断許可を頂き、2 日後の朝休む間もなく出国しました。しばらくして SGUL からは、実習開始前に 2 週間英国内で待機することを指示されましたが、既に渡英していたことが功を奏し、初日からの参加を認められました。予定を変更しての渡英は、一か八かの掛けでしたが行動して良かったと心の底から安堵しました。

【5. 実習開始後】

初日の流れ

9:00 に Student Centre に行った後、9:15 から Occupational Health に向かう予定でした。しかし、待てども Student Centre が開かなかったため、先に Occupational Health に行くことにしました。2 週間待機してようやく迎えた初日だったので、この健康チェックで実習拒否をされないかと緊張しましたが、簡単な質問をされたのみだったので少し拍子抜けしました。ただ、HBs 抗体価が日本の基準を満たしてはいるものの英国の基準を満たしていないと指摘されたときは焦りました。しかし、その場ですぐにブースターを打ってもらえました。想定外の質問としては結核の検査をしているかというもので、私は T-SPOT 検査を以前に受けていたのでその結果を見せましたが、必須だったかは分かりません。Immunity Check を

15分ほどで終えた後は再度 Student Centre に戻り手続きを行い、学生カードを作って頂きました。訪問者の一団がカード作成のために列を作っていたので 30分以上待つことになり、全ての手続きを終えたのは 10:30頃でした。いよいよ実習が始まるとなると、1人だったということもあり急に緊張感に襲われました。一旦ベンチに座り、サンドイッチを食べて心を落ち着けてから、Supervisor から事前に伺っていた集合場所(腎臓内科病棟 Champneys Ward)に向かいました。

実習

(これまで多くの JMEF 派遣生がお世話になった Oliveira 教授は今年退職されます)
留学前に Oliveira 教授に連絡を取った際、ローテーション中の 4 回生に合流することを勧められました。2 日目に 4 回生と思わしき 3 人を見つけたので声をかけ、スケジュール表をもらい、水曜日から彼らが受ける Teaching に参加しました。腎臓内科には Oliveira 教授の他に 6 人の Consultant がおり、中でもその時病棟担当をされていた Dr Stern と、Teaching や外来で何度も顔を合わせた Dr Banerjee には大変お世話になりました。Dr Stern は医師になる前に新聞記者として日本で暮らしたことがあり、とてもフレンドリーに接して下さいました。午後に Doctor's Office に顔を出すと毎回、紅茶はいるかと声をかけて下さいました。Dr Banerjee は厳しいながらも非常に教育的です。外来での患者の呼び入れや血圧測定など、ちょっとしたことでも学生を臨床に関わらせようとします。私が参加した彼の Bedside teaching は初回が Gastroenterology の OSCE 身体診察でした。入院患者さんの身体診察を 1 人ずつ一通り行い、陽性所見を紙に書き、最後に答え合わせをする形で指導を受けました。私は 1 月に Edinburgh 大学の消化器内科で実習をしていたので診察の手順を知っていましたが、日本で教わる内容とはかなり異なるため予習は必須です。Geeky Medics の動画が非常に参考になりお勧めです。ちなみに、私が診たのは PKD の患者さんだったようで、石の様に硬く腫大した腎臓を触れましたが、あまりに巨大だったため腎臓だとは気づきませんでした。Oliveira 教授の Teaching では、脳神経の身体診察や、心電図について学びました。教授は非常に博識で、薬学や植物学、神話など様々な雑学を交えて楽しく、そして優しく指導して下さい、私が理解できているか頻りに気にかけて下さいました。また、過去の報告書にあった Acute Medical Unit での実習ですが、今年は学生がローテーションを既に終えていました。Dr Stern に相談して個別に実習をさせてもらえるよう掛け合っていた結果、3 週目に行える予定でしたが COVID-19 の関係で中止となってしまいました。Teaching 以外の時間は、Morning round に同行したり、Clerking を自主的に行ったりしました。Edinburgh で実習を行った時は、スコッチアクセントが想像以上に大きな障壁となり Clerking を行う患者選びにも苦労しましたが、それと比べると London の患者さんやスタッフの英語は、英語力の乏しい私にとって聞き取りやすかったです。腎臓内科は Teaching の機会が多く、また教育的なスタッフが多かったので、過去の派遣生がこの科での実習を勧めていた理由がよく分かりました。

実習後

COVID-19 に関して、日本で数ヶ月かけて起こったことが英国では数週間あるいは数日で起きたような感覚でした。2 週目の途中までは私の周りでも、ジョークまじりに握手代わりの **Elbow bump** をするなど、まだまだ余裕のある雰囲気でしたが、瞬く間に三次感染が広がり感染者数が急増しました。毎日行われていた **Boris Johnson** 首相の会見からは世界の終わりが迫り来ているかのような緊張感と危機感が伝わってきました。人口の集中する **London** は特に感染拡大が急速でした。**Panic buying** が起こり大型スーパーに行くとなごごとく空で、その異様な光景からも起きている事の重大性を感じました。そして、2 週目金曜に **SGUL** で学生の病棟実習が中止となりました。**Oliveira** 教授や **Dr Banerjee** に相談し継続可能な事を考えて頂きましたが、一刻一刻と状況は悪化し、3 週目月曜には **non-essential contact** は避けるよう政府から要請が出たため、職員は在宅勤務、学生は自宅待機となりました。お世話になった先生方に最後に会ってお礼をすることも自重せざるを得ず、急いで荷物をまとめ帰国の途に着きました。**London** から離陸する時は、それまでの緊張の日々から解放されすっと肩の力が抜けたと同時に、このような形で実習を終えることになった現実感が湧き、無念でたまりませんでした。

【6. 現地での生活】

Wi-Fi

大学エリア、病院および寮では **Eduroam** と呼ばれる **Wi-Fi** が利用可能でした。**SGUL** から留学開始前に送られてくる E メール (件名: **Welcome to SGUL!**) に記載されていた **SGUL** ポータルサイト用の **ID** が必要でした。**iOS** 端末からは、この **ID(username@sgul.ac.uk)** とパスワードを入力するのみで **Wi-Fi** に接続でき、またこのアカウントで **office365** も利用できました。

宿舎とその周辺環境

例年通り **Horton Hall** に滞在させて頂きました。大学から徒歩 15 分ほどの閑静な住宅街の中にあります。部屋は、換気扇の音が煩かったものの、十分な広さがあり収納スペースも多く非常に快適でした。また、キッチンのゴミは毎日回収され、2 週間に一度は清掃が入りピカピカにしてくれます。清掃サービスがあることに加え、**London** という立地を考えると、寮費はリーズナブルであるように感じました。フラットメイトは、同じく **elective** 参加のために同時期に入寮した医学生の **Alex** (オーストラリア) と **Nikita** (バルバドス)、それから **SGUL** の研究室で 10 週間のインターンシップ留学中の大学院生 **Rana** (ベルギー) の 3 人で、3 週目からは **self quarantine** を終えた西岡くんも合流しました。全員留学生で、1 人を除いて皆 **elective student** として来ていることもあり話題には事欠かず、すぐに仲が深まりました。英国内での **COVID-19** の蔓延に伴い 3 週目に全員が留学を中断し帰国を余儀なくされた時にはキッチンで慰め合いました。

Horton Hall に滞在したのは 18 日間だけでしたが、その間に火災報知器が 2 度鳴りました。

また、隣の建設現場で業者がトラブルを起こし、寮のエレベーターとガスの供給が 10 日間ほど止まりました。部屋が 5 階だったので毎日の上り下りはかなり大変だった上、まだまだ肌寒い 3 月にお湯が出ないのはかなり辛かったです。学生の不便を思い、マルゲリータピザをプレゼントすると Horton Hall から連絡が来た時は、欧米らしいなと微笑ましい気持ちになりました。

寮の周辺には、すぐ近くに小さな Tesco はありますが、他に買い物や外食するところはないので、Tooting Broadway 駅周辺まで出る必要がありました。その辺りには、新生活に必要な物が手頃な値段で手に入る Wilko、衣服が安い Primark、£1 ショップの Poundland、格安スーパーの Aldi や Lidl など、英国で知名度の高い店は基本的に揃っています。また、London では普通の事のようにですが非常に多国籍です。英国の他の都市に慣れていると Tooting に漂う異国感に驚くかもしれません。街を歩くと有色人種がマジョリティーを占めているように感じました。実際、アフリカやカリブ系の比率が英国内の他の都市と比較して高く、SGUL では黒人に好発する疾患を学ぶことも重要なようです。留学前は COVID-19 のこともあり差別に合うのではと心配していましたが、地元住民も医療従事者も患者さんも非常に多国籍でアジア系の人も多いためでしょうか、一度も嫌な思いをすることなく終えることができました。

交通

寮から 5 分ほど歩くと London 中心部に向かうバス乗り場、20 分ほど南に歩けば地下鉄、北に行くと鉄道の駅があります。Oyster Card があればバス(£1.5)や地下鉄の利用が便利になる上、地下鉄は料金が安くなるので購入をお勧めします。私は加えて Railcard を年会費£30 で作りました。鉄道料金が常に 2/3 になる上、この Railcard を Oyster Card に登録すると地下鉄の off peak 料金も 2/3 になります。

観光

London ではあまり観光をしなかったのですが、1 つ紹介するとサイクリングはとても良かったです。一日中走り回ってもどこまでも市街地が続き、そしてエリアによってガラッと雰囲気が変わる面白さは英国内で London だからこそ楽しめることだと思いました。寮には駐輪場もあるので、自転車を足として使いたい人は購入しても良いかもしれません。加えて、London 中心部には Santander の無人レンタルサイクルスポットが点在しており、1 回あたり 30 分以内の乗車であればたった£2 で 24 時間何回でも乗り放題のためお勧めです。私はサイクリングツアーにも参加しました。グループツアーのはずが COVID-19 の影響で私以外全員キャンセルとなり、まさかのプライベートツアーとなりました。ツアーの途中に John Snow がコレラ蔓延の原因を突き止めるきっかけとなった井戸にも案内して頂き、コロナ終息を祈願してきましたが、願い叶わず留学は中断となってしまいました。

クレジットカード

英国では、決済方法はクレジットカード、特にコンタクトレス決済（Apple Pay など）が主流となっています。1月に Edinburgh に留学した際に現地の人ほとんどコンタクトレス決済なのを見て、今回の留学のために海外での Apple Pay に対応している学生専用ライフ・マスターカードを用意しました。非常に便利だったのでお勧めします。また現金についてはあまり使う場面はありませんでしたが、その調達手段としてもクレジットカードのキャッシング機能を利用しました。街のあちこちに ATM がありすぐに現金が引き出せました。

通信（携帯）

英国のキャリアの大手には O2, 3, EE, giffgaff などがあり、giffgaff は実店舗を持たない代わりに安いので学生に人気があります。私は留学前に giffgaff のホームページから SIM カードを日本に取り寄せ(無料)、入国時に空港のフリーWi-Fi を利用しアクティベートしました。留学中は£10 プラン（通信 6GB、SMS・通話無制限/30 日）を利用しました。現地の電話番号を持ち、いつでも通信ができるのは便利で安心です。au、SoftBank などのスマートフォンの場合は、SIM ロックがかけられているので出国前に「SIM 解除」をする必要があります¥3,000 程かかります。

【7. 最後に】

「100年に1度のパンデミック」と言われる世界的大混乱の中、当初の予定よりも短い期間ではありましたが、SGUL で学べたことは生涯忘れ得ない貴重な経験となりました。様々なことを学び経験し、実習の中で自信が付くこともあった一方で、自分の英語力や医学知識の乏しさから歯痒い思いをすることも多々ありました。今後は、これらの経験をバネとしてより一層勉学に励んで行きたいと思えます。最後に、このような状況下でも留学実現のためにサポートして下さった JMEF のスタッフの皆様にご心より御礼申し上げます。

【8. 経費】

滞在中に要した経費（3/02 - 3/19）抜粋

交通費	¥6,739	（観光含む）
食費	¥45,070	（観光含む）
寮費(3/02-3/28)	¥88,668	（後日 3/20 - 3/28 分返金）
実習費	¥43,007	（実習中断のため後日返金）
日用品	¥18,275	
通信費（携帯）	¥1,482	
洗濯・乾燥代	¥1,380	
海外旅行保険代	¥17,980	（2/16 - 3/20、t@biho）

その他の費用 抜粋

航空券など¥126,425、ビザ：STSV 申請費用¥14,356、ビザ：センター利用料¥8,164（大阪 ビザセンター）、ビザ：郵送サービス¥1,620、ビザ：SMS サービス¥260、ビザ：残高証明書¥540（ゆうちょ銀行定期預金、英文）、ビザ：通帳翻訳¥3,300（くまざさ書房、口座情報のみ）

オックスフォード大学医学部

University of Oxford

2020.03.02～2020.03.16

◇群馬大学 寺島 里佳

◇浜松医科大学 張 択合

University of Oxford の Department of Cardiology 臨床実習報告書

群馬大学医学部医学科 6年 寺島 里佳

I. はじめに

医学教育振興財団主催の「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」プログラムを通じて、2020年3月2日～3月16日まで、英国の University of Oxford の教育医療機関である John Radcliffe Hospital の Department of Cardiology 循環器科で実習をさせていただきました。今回の短期臨床実習は COVID-19 の影響を受けてかなり変則的で、私も含め、JMEF から英国に留学した日本の学生は非常に苦労しました。来年度参加される皆様の参考にならない話も多いかもしれませんが、COVID-19 で変化していく医療現場を最前線で見ることができ、勉強になったので、COVID-19 の状況も含めて今回の報告書に書かせていただきました。

II. 志望動機

私は将来、国際的に活躍できる physician-scientist (内科医兼研究医) になりたいと思っております。私は幼少期をアメリカで過ごしたおかげで英語が得意ですが、大学に入ってからそれだけではグローバルスタンダードの医師になれないと感じるようになりました。英語力のキープとグローバルな考え方を身につけるために、そして医学という専門分野を世界中の医療者や研究者と英語でディスカッションできるようになるためには、やはり実践が必要だと感じました。

英国の臨床留学で学びたいことは3つありました。1つ目は、イギリス式医学教育のもとで患者さんとの信頼関係構築を強く重視した診療制度を経験することです。2つ目は、イギリスの医療制度 National Health Service (NHS) が実際にどのように機能しているのか、そこから日本が学べることは何なのかを考えることです。3つ目は、世界中から集まる優秀な elective の医学部生と切磋琢磨し、そのネットワークを将来に活かすことです。

III. 留学準備

2019年4月6日 IELTS 受験

2019年5月31日 校内選考応募締め切り

2019年6月12日 校内選考面接

2019年7月26日 JMEF 応募締め切り

2019年8月26日 JMEF 面接

2019年8月30日 JMEF から合格通知&University of Oxford への placement 決定

2019年10月28日 University of Oxford への Application 到着期限

2020年1月8日 Department of Cardiology への placement 決定

2020年1月27日 東京 VISA センター訪問

2020年2月12日 家に visa 到着

元々の予定では、

2020年2月29日 London Heathrow Airport 到着

2020年3月2日-3月27日 University of Oxford elective program

しかし、2020年2月13日 英国政府が COVID-19 の影響を受けて、アジア諸国から入国する医療関係者は14日間以上医療現場から離れなければ英国の医療現場に出るはならないという規制を発表しました。

2020年2月14日 University of Oxford から連絡が来て、英国政府の規制に引っかかる場合は elective program 採用の見直しがされると言われました。私は急遽日本で行っていた実習を中止し、早めに英国に渡航するから elective をさせて欲しいと交渉しました。許可が降りて、すぐに飛行機を取り直しました。

2020年2月20日 London Heathrow Airport 到着。

2020年2月20~2月26日 寮に入居できるのが26日からと言われたので、それまでロンドンのホテルに滞在しました。

2020年2月26日~ St. Hilda's College の寮入り

2020年3月2日 Elective program 開始

2020年3月16日 Elective coordinator から COVID-19 の影響を受けて、elective program の中止の連絡。急遽飛行機を取り直し。

2020年3月19日 英国を出国

2020年3月20日 日本に帰国 (3月21日から英国も入国制限対象となりました。)

i) IELTS

University of Oxford の医学部は世界ランキングで1位であり、そのような環境を一度経験してみたいという思いがあったことと、世界中から集まる elective の学生と交流したかったため、私は絶対に University of Oxford に行きたいと考えていました。そのため、IELTS overall 8.5 以上を目指していました。しかし、英語そのもので困ったことはないのに、医学の勉強や医療英語を勉強するのに時間を当てたいと考え、なるべく IELTS に時間をかけたくなかったです。Thomas Jefferson University へ3月に臨床留学しており、その後 New York にしばらく滞在してから帰国する予定だったため、帰国直後に IELTS の受験日を設定しました。ずっと英語を話す環境から時間が経つ前に受験したおかげで、特別に対策せずに overall 8.5 (Listening 8.5, Reading 9.0, Writing 7.0, Speaking 9.0) が取れました。Writing は特殊なので、対策したほうがよいかもしれませんが、それ以外は海外旅行や留学後に受験

するのも手だと思います。

ii) JMEF 選考

JMEF の面接では学生一人に対し、面接官の先生が 6~8 人程度いらっしゃって、英語と日本語の質問を交互にされました。他の実習先の学生は医学的な知識を問う質問も聞かれたそうですが、私ともう一人 Oxford へ実習した学生に関しては、医学知識を問う質問はされませんでした。志望理由、なぜ Oxford に行きたいのか、などの典型的な質問に加えて、“Tell me about a patient that left an impression on you (in under 1 min)”や「群馬県のいいところと、どうすれば群馬県の地域医療が活性化するのか」などの変わった質問もされました。

iii) 書類の準備 (Oxford 用と visa 用)

JMEF から合格通知が届くと、今度は Oxford に送る書類を準備する必要があります。学校関係者からの推薦文 2 通と応募用紙を作成します。私は元々 Acute General Medicine を第一志望にする予定でしたが、Acute General Medicine では 3 月一杯 elective の学生を受け入れていないという連絡が elective coordinator の Ms. Cook から届いたため、他の Department を志望しなければなりません。Acute General Medicine に行く前提で英国留学の志望理由や University of Oxford の志望理由を考えていたため、どこの Department を志望するか、そして志望理由をどのように書こうかを考え直す必要が出てきました。内科系に興味があり、循環器内科に魅力を感じるため、Department of Cardiology を第一志望にし、他の内科系の診療科を第二と第三希望として応募用紙は書きました。この応募用紙はすべて英語で 7 ページに渡るので、大変でした。その後、Oxford からはなかなか連絡が来なくて、elective coordinator の Ms. Cook に何度も催促しましたが、最終的に placement が決定したのは 1 月上旬でした。犯罪経歴証明書や visa 申請用の書類はすべて先に揃えておき、あとは Oxford からの visa 用の手紙で必要書類がすべて揃う状態に整えておきました。Placement letter が届いてから visa センターで申請しました。Ms. Cook からは学生証 ID の申請用紙、Security form、Occupational Health の online アンケートなども送られてきました。Occupational Health では日本の健康診断では通常行わないような検査に関する情報も聞かれますが、蔓延国でなければ関係ないものが多いですし、足りない項目に関しては Oxford に到着後に無料で検査してくれるので心配はいりません。

IV. 生活環境

University of Oxford は現在 39 の college で構成されています。college は学部別に分けられているのではなく、各 college にさまざまな学部や専攻の学部生・院生が混ざって所属しています。それぞれの college は独自で運営されており、外観の綺麗さ、施設の充実具合、イベントの頻度と質、寮の綺麗さは college によって異なります。どこも素敵だと私は思ったので、外れはないと思います。私はもともと Ivy Lane Flats に宿泊したかったのですが、連絡をしたときにはすでに満室でした。Ivy Lane Flats に泊まりたいと考えている方は

placement が決まる前から仮予約しておいたほうがいいと思います。

Elective program が始まってから知ったことですが、Ivy Lane Flats は college の所属ではなく、NHS 職員用の寮です。他の elective の学生と病院職員などが宿泊していますが、Oxford の大学生活を満喫できるような環境ではないです。Ivy Lane Flats に泊まることの最大のメリットは宿泊代がかからないことと、病院に一番近いことです。Ivy Lane Flats のデメリットは city centre から離れており、周りにはスーパーやレストランが少ないことと、綺麗なキャンパスで学生らしい体験ができる場所ではないことです。私は最終的に St. Hilda's College の大学院生用の一軒家 (6 人暮らし) に泊まりましたが、自分の bedroom 以外はすべて共有だったので、宿泊先の大学院生と仲良くなり、夜な夜な語りあったのがとても楽しかったです。立地は Cowley Road という世界中の料理が食べられるレストラン街にあったので、食べ物のクオリティが高くて充実していました。St. Hilda's College の図書館を使用できるような visitor's pass をもらうことができ、elective program が始まるまでの一週間程度、図書館で勉強することができました。St. Hilda's College には学生や教職員用の dining hall があり、そこで夜ご飯を食べると安く済んだので助かりました。宿泊先から病院まではバスで 15~20 分程度で、通勤に毎日バスを使うので安く済むように 4 週間分のバスチケットを購入しました。Ivy Lane Flats に宿泊する場合は、病院内の cafeteria で夜ご飯を食べることもできますが、夜ご飯は品揃いが悪く不評でした。また、病院内に Cairns Library という図書館があったので、そこで勉強することができます。Ivy Lane Flats に宿泊している elective 学生が 4-5 名、Green Templeton College には 2-3 名、その他の elective 学生はそれぞれ異なる college の寮に泊っていました。

V. 実習内容

私は John Radcliffe Hospital の Oxford Heart Centre で Department of Cardiology の実習をさせていただきました。初日は Cardiology の先生に Oxford Heart Centre の案内をしていただき、Department の各部署で毎日行われている活動のスケジュールをもらいましたが、次の日からは自由に好きなところに行っていいいと言われました。場所別には clinic, cath labs (カテ室), wards (病棟), imaging (画像検査) が毎日行われていて、Cardiology 内では intervention (カテ)、Electrophysiology (EP; 電気生理)、Structural (構造的心疾患) の sub-group に分かれています。

英国の医師は卒後の 2 年間は Foundation doctor (日本で言う研修医) として複数の診療科でトレーニングを受けます。その後、specialty registrar (日本では後期研修医) として特定診療科でトレーニングを受けてから consultant (専門医) になれます。病棟を管理しているのは主に registrar で、クリニックを持っているのは consultant のみでした。Consultant は cardiology の中でも不整脈や肺高血圧症などさらに sub-specialty を持っていて、専門外来を担当していました。

Clinic では、General/intervention, arrhythmia (不整脈)、Adult Congenital Heart Disease (ACHD; 成人先天性心疾患)、Pulmonary hypertension (肺高血圧症)、Heart Failure (心不全)、Inherited

Cardiac Conditions (遺伝性心疾患)、Structural (構造的な心疾患)などと、全てが専門外来に別れていました。カテ室では、Intervention グループでは coronary angiography や PCI, EP グループでは SVT ablation, AF ablation, pacemaker や ICD 留置、Structural グループでは TAVI, Mitraclip, PFO closure などが見学できます。毎週木曜日には昼食付きの Cardiology Journal club が開催されました。

一日のスケジュールの例

例 1. Ward+Clinic の日

8:15 Handover meeting (毎朝行われるミーティング)

8:30 Ward rounds (CCTU, Structural, EP, intervention の4つの回診から選べる)

10:00 先生に rounds で見た患者さんの中でも特に面白い症例を教えてもらって、カルテや画像を見る。一人で数人患者さんの診察に行く。

12:00 lunch

13:00 Clinic 見学

17:00 終了

例 2. Cath lab の日(1つのチームに挨拶して一日中そのチームに付く)

8:00 Cath lab meeting (scrub に着替えてからミーティングに参加する)

9:00 Mitraclip

12:00 lunch

13:00 TAVI 1 件目

15:00 TAVI 2 件目

Department of Cardiology は非常に大きな department で、実習も自由なため、最初はどのように行動すれば良いのかわからずに迷いました。しかし、このままでは何も学ばずに帰ることになってしまうと危機感を感じて、どういことを学びたいのかをアピールし、積極的に行動するように意識しました。私は pulmonary hypertension や structural に特に興味があったので、そのチームの先生を捕まえて話をして clinic に入れてもらったり、回診に参加させてもらったりしました。すると、clinic を見学させていただいた先生に『今度の木曜日に面白い症例の TAVI をやるから君も見に来たらどうだ』と声をかけていただき、また別の先生には『今診ている患者さんの問題が何なのかを身体診察だけで当ててみなさい』と急に難題を振られ、徐々に先生にも認識されるようになり、面白いディスカッションができるようになりました。

しかし、今度は自分がいかに cardiology について無知なのかを痛感し始めました。Cardiology は専門性の高い領域で、ディスカッションに求められる知識レベルが私の学生レベルよりも遥かに高かったです。Department of Cardiology を実習していた elective の学生はもう一人いました。インドネシアから来た彼は最終学年で国家試験受験後に elective program に参加していました。彼は非常に優秀で、循環器内科医になると決めて、有名な Cardiology 著書はすでに読み終わっていました。彼に刺激を受けて、私も勉強しなければならないと思いました。先生が話していたことでわからなかったことは彼にも教えてもらい、おすすめの Cardiology の textbook も教えてもらって実習後は病院内にある Cairns library で cardiology の勉強をしました。今もまだまだ未熟ですが、実習初日と実習が中止になった2週間後では、cardiology に対する私の知識量は全く異なりました。世界トップレベルの

大学で学ぶ意義と、優秀な人と切磋琢磨することの重要性を改めて感じました。

Department of Cardiology 以外のアクティビティとしては、不定期で内科系と外科系の Medical Grand Rounds が開催されて、掲示板に開催日時とテーマが発表されました。また、Oxford の 1st year clinical student (つまり学部 4 年生)向けに開催されている Clinical Skills と Simulation の授業に elective の学生も参加することができました。こちらは Dr. Elize Richards が担当しており、年間スケジュールの excel ファイルをもらうことができ、いつでも飛び入り参加ができます。Clinical skills ではルート確保、ECG、などその日のテーマに沿って手技を学ぶことができます。私が特におすすめしたいのが、Simulation のクラスです。学生が数人ずつのグループを作り、simulation の人形に対して初期対応を行います。グループ内でリーダー、カルテ係、手技係、などと役割分担をします。Simulation 人形は刻々と vital 変化するため、リーダーは simulation 人形に声をかけて病歴聴取を取りながら vital 変化をチームに伝え、カルテ係はカルテ入力や検査・薬のオーダーを行います。外回りの手技係は薬の静脈投与や検査の提出を行います。Simulation は非常によくできており、カルテ上で検査や薬をオーダーしなければ実行することができず、採血やルート確保に必要な道具や薬は別の部屋にあり、自分たちで取りに行き、検査してほしいものをそこへ提出しなければなりません。先生方は simulation の隣の部屋からガラス越しに simulation の部屋の中が見えるようになっていて、Simulation 人形の声は隣の部屋から先生がマイクを通じて受け答えしています。Simulation は動画で撮っていて、別の待機室で他グループの学生が見ています。Simulation が終了後、動画を見ながらどこが良かったのか、悪かったのかを先生と学生でディスカッションをします。私はこの simulation に非常に感心しました。例えば、血液がちゃんと採取されておらず血ガスが測れないなど実際の現場でも起きそうなリアルなミスが起きることや、急激な vital 変化に対していかに冷静にかつ素早く対応できるのかが試されていることから、学生は実践力がつくと感じました。

VI. 考察

今回の実習で私が特に興味深かったのが、NHS とその仕組みについて学ぶことができたことと COVID-19 で変化していく医療現場を見ることができたことです。その 2 つについてより詳しく書かせていただきます。

1. 医学教育と NHS について

National Health Service (NHS)は英国の国営医療保険制度であり、英国の医療のほぼすべてを統括しています。日本にも国民皆保険制度がありますが、それぞれの個人経営のクリニックや民間企業に病院の運営を任せています。NHS は医療保険だけに留まらず、NHS が医学教育の費用を捻出して医療従事者を産出し、NHS が病院を運営して、全国民の医療費も NHS が賄っています。この途切れない医療制度が強みを発揮するところがいくつかありました。

i) 全国どこでも質の高い医療

NHS の provider (医療提供者)は primary care (一次ケア), secondary care (二次ケア), tertiary care (三次ケア)に分けられています。Primary care は主に General Practitioner (GP)で構成されており、secondary care は District General Hospital (DGH)のことを指し、その地区の市中病院のような存在です。最後に、tertiary care は John Radcliffe Hospital のような大学附属の academic hospital のことであり、tertiary care では脳外科手術や移植手術など専門性の高い処置や手術を受けることもできます。NHS の管理によって、primary care, secondary care, tertiary care は提供している医療のレベルに重複が少なく、患者さんは緊急疾患でない限り、primary から secondary から tertiary と順番に高度医療へと移動してきます。また同時に tertiary でやるべきことが済んだら secondary に降ろして、tertiary に患者さんが溜まらないようになっています。私が実習した John Radcliffe Hospital は tertiary care であり、GP が患者さんの全身状態を把握してくれているため、心臓以外のお薬調整など細かいことは気にする必要がなかったです。長期入院も少なかったため、英国の cardiologist のワークライフバランスは日本よりも高いと感じました。NHS は全国なるべく均等に primary, secondary, tertiary care を配置していて、一つの地区の primary, secondary, tertiary care の複数医療機関を束ねて”trust”という関連病院組合を構成しています。患者さんは基本的に自分の住んでいる地区の trust の中ですべての医療が完結し、例えば London の患者さんが Oxford で医療を受けるなどということは基本的に起きないです。英国医学部出身の医師は卒後、優秀な人が全国に散らばるようなシステムになっており、どこの trust にも優秀な先生が配属されており、同じ secondary care や同じ tertiary care を比較したときにできる医療行為や医療の質は全国共通です。そのため、日本のようなブランド病院という概念もなかったです。NHS が一括管理しているからこそ、実践できるシステムだと感じました。

ii) 膨大な患者データ

NHS のような一括管理システムの利点は英国全土の患者さんのデータを集約するポテンシャルがあることです。UK biobank は 2006 年に開始された非営利のデータバンクであり、患者さんの病気、全身状態、遺伝情報、環境因子 (ライフスタイル、薬など)のデータを保存し、特定の疾患と関連のある因子があるのかなど、研究できるようにしました。NHS のように医療をすべてカバーし、途切れのないデータ管理を行うことができると、膨大なデータが集まり、そのデータを研究することでさらなる医療の質の向上に繋がりました。

また、同じ trust 内では複数医療機関に受診している患者さんのカルテを共有して見ることができるようになっています。Oxford にいる間に参加した Medical Grand Rounds では Emergency Department (ED; 救急部)がどのようにして”big data”を解析して診療に活かしているのか、というテーマの講演を聞くことができました。ED に送られてくる患者さんはどこから来て、どのくらいの時間をかけてどの診療科を通過していき、最終的にどこに帰されるのかという患者さんの経過と移動ルートを示した解析や、ED が最も忙しい時間帯と患者の年齢層の解析、一ヶ月や一週間の中で患者の人数がどう変動するのかの解析を示し

ました。患者さんが ED に来院してから帰宅するまでの経過で停滞が発生しやすい場所の停滞解消法、ED の忙しさを反映したスタッフ人数の組み直しなどの現実的な解決策が取られており、私はとても感心しました。このようなデータ解析は同じ trust 内の複数医療機関のデータを一箇所から簡単にアクセスできるから行える解析であって、もし同じことを日本で行うとすれば、患者さんが転院先でどうなったのか、いつごろ帰れたのか、フォローアップで何週間後に GP を訪れたのかなどの情報をすべての患者さんにおいてまとめるのが難しいです。

NHS も完璧ではないですが、日本の医療制度は NHS から学べるものがたくさんあると感じます。特にこの primary care をベースとした重複のない primary, secondary, tertiary care の医療体制モデルと、患者さんの医療データの扱い方に関しては日本でも取り入れていきたいです。

2. COVID-19 について

i) 感染症拡大の凄まじいスピード

英国から日本へ帰国した 3 月 20 日までの一週間で英国での COVID-19 の症例数は 590 件から 3269 件まで 5 倍以上に爆増しました。実習開始一週間目は、日本の方が症例数が多かったため、先生も患者さんに紹介してくれるときは『日本から来た医学生だよ。大丈夫、コロナは持っていないから！』と冗談交じりで説明してくださっていました。私自身も elective program 中に少しでも風邪を引いて、咳一つでもしたら病院から追い出されるだろうと思い、プレッシャーを感じていました。Elective program の最後の数日で状況はガラリと変わりました。Oxford では COVID-19 の感染例の 1/3 が Oxford 学生間の感染であったため、まずは University of Oxford の college が閉鎖されました。その後、外科系の診療科で実習をしていた elective 学生が theatre (オペ室)立ち入り禁止になりました。その理由は、elective 学生にマスクやガウンなどの Personal Protective Equipment (PPE)を無駄使用できない、という判断でした。COVID-19 のためにベッドを空けなければならないということで、Cardiology 病棟の入院患者は減らされ続けました。Cardiac and Thoracic Care Unit (CCTU)では人工呼吸器が使えるため、空けなければならないということで、循環器外科を含めた術後 ICU 管理が必要な手術は緊急手術以外すべて延期にされました。Department of Cardiology の cath lab meeting に参加させてもらったところ、緊急の心筋梗塞が来て、PCI することになったとき、COVID-19 陽性だったらどうするのか、など白熱した議論が交わされるようになりました。Cardiology の clinic では手指消毒液や手袋などが大量に盗まれて、スタッフもピリピリしていました。Cardiology の Journal club では COVID-19 は心筋炎を起こしうることやトロポニンの上昇がみられるという論文で知識を共有し、COVID-19 患者の ACE 阻害剤や Angiotensin receptor blocker (ARB)の 継続をどうすればいいのかなどのコンサルトが来ることを想定した勉強会が行われました。

Elective program の 3 週目の月曜日には Oxford 現地医学生の実習も中止になっており、その日の午後に elective 学生の実習も中止になるという連絡が来ました。病院に一番近い寮

である Ivy Lane Flats に泊まっていた他の elective 学生は、Ivy Lane Flats を COVID-19 に対応する NHS 職員の宿として利用するため、早急に宿を出るようにと追い出されてしまいました。私達 elective 学生は急いで自国へ帰国しました。

ii) 公衆衛生とグローバルヘルスの重要性

医師は患者さん一人一人を治療することはできますが、このような pandemic ではできることは限られています。公衆衛生やグローバルヘルスを正しく理解する人が、国家レベルで対策をしなければならぬと感じました。さらには、外出禁止がどれほど感染者減少に寄与するのかの数学的モデルが発表され、台湾では GPS を使用した国民の位置管理が始まり、数学や IT が医療分野で駆使されている様子が世界中で展開されました。これからは、多職種で協力し合いながら、よりよい医療現場と医療政策を立てていかなければならないと強く感じました。

iii) 学生も COVID-19 の最前線へ

留学プログラムが急遽中止になり、同プログラムに参加していた他国の医学生とこれからどうするのか、いつ帰国するのかという話になりました。そのときに、他国の学生が、「自分の国も大変なことになってきたからそろそろ帰らなければならない。」と言い出しました。「大変なことになっているならば帰らない方がいいのでは？」と私が言ったら、「人手不足で学生の手も必要になってくると思う。手伝わなければならない。」と彼らは言いました。私はこの返事にとても驚きました。自分は医療現場ではきっと使えないだろうと無意識のうちに思っており、自分も手伝わなければならないという考え方に至らなかったことを恥ずかしく感じました。実際に COVID-19 で医療崩壊を迎えたイタリアでは、最終学年の医学生を最終試験免除で現場へと送り込みました。幸いなことに、日本では医学生が最前線へ送り込まれることは、現時点ではないですが、他国の医学生と同じように 6 年間の医学教育、そのうち 2 年間は臨床実習を行ってきたのに、どこでこのような意識の差、実践能力の差が生まれてしまうのかと感じました。Student doctor が行える医療行為の権限を増やす、実践的な臨床能力を身につけるトレーニングを実施するなど、日本の医学教育も発展していくことを期待すると同時に、自分自身がより能動的に医療に従事する者としての自覚と責任感を養わなければならないと感じました。

VII. 謝辞

University of Oxford での臨床留学を実現するにあたり、多くの方々に大変お世話になりました。このような機会を与えてくださった医学教育振興財団 (JMEF) の先生方、書類の準備や連絡にご協力いただきました事務の皆様にも心より御礼申し上げます。推薦状を作成していただきました群馬大学の先生方、カリキュラム調整をしていただきました群馬大学学務の皆様、COVID-19 の影響を受けて急遽実習予定を組み直していただきました日本での実習先病院の皆様にも深く感謝致します。COVID-19 で大変な中、充実した elective program

になるよう、最初から最後までサポートして下さった Ms. Carolyn Cook, Department of Cardiology でお世話になった Dr. Alex Pitcher, Dr. Sam Dawkins, Dr. Eleanor Wicks, Dr. Rohan Wijesurendra を始めとする先生方とコメディカルスタッフの皆様に御礼申し上げます。最後に一緒に elective を行った世界中から参加した elective 学生、お世話になった Oxford の現地医学生に感謝致します。

この留学で学んだことを活かし、将来は患者さんに最善の医療を提供できるグローバルに活躍する医師になりたいと思います。

VIII. 経費

航空券 約 15 万円

ロンドンでのホテル代 500 pounds

St. Hilda's College の寮 377 pounds

SIM カード 5000 円

Bus card (4 weeks) 60 pounds

食費 70 pounds/week

IX. 参考文献

- “The NHS provider sector” <<https://nhsproviders.org/topics/delivery-and-performance/the-nhs-provider-sector>>
- “The Electronic Health Records System In the UK”. Centre for Public Impact. <https://www.cpi.ac.uk/ehrs-uk/>
- 画像 2. 他国の elective student と一緒に撮った写真 (私は右から 3 番目) <https://www.ouh.nhs.uk/patient-guide/electronic-patient-record.aspx>
- “About UK Biobank”. Biobank. <<https://www.ukbiobank.ac.uk/about-biobank-uk/>>
- “Coronavirus UK map: How many confirmed cases are there in your area?”. BBC News UK. <<https://www.bbc.com/news/uk-51768274>>. (Published 26 April 2020)

University of Oxford 実習報告

浜松医科大学医学部医学科 6年 張 択合

【はじめに】

この度、医学教育振興財団（JMEF）の「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」プログラムを通じ、Oxford 大学医学部の John Radcliffe Hospital の Department of Infectious Diseases (ID)において、2020 年 3 月 2 日から 3 月 16 日までの 2 週間の間、臨床実習させていただきました。今後留学を考えている医学生の方々の参考になれば幸いです。

【応募から渡英まで】

日付	内容
8 月 25 日 (2018 年)	IELTS 受験
5 月 31 日 (2019 年)	学内応募締め切り
6 月 24 日	学内選考 (面接)
8 月 8 日	書類選考結果通知
8 月 26 日	JMEF 面接
8 月 30 日	最終結果通知
10 月 23 日	Oxford 大学へ書類郵送
1 月 14 日 (2020 年)	Oxford 大学から受け入れ通知 (E メール)
1 月 17 日	犯罪経歴証明書発行手続き
1 月 21 日	ビザ申請 (Priority Service)
1 月 24 日	犯罪経歴証明書受取可能
1 月 27 日	ビザ受取可能通知
2 月 1 日	アメリカへ出国
2 月 29 日 (3 月 1 日到着)	イギリスへ出国
3 月 2 日	オックスフォード大学実習開始

この英国留学に加えて、2 月 3 日から 2 月 28 日まで University of Chicago Hospitals で臨床留学を予定していたため、ビザ申請を 5 営業日が発行されるサービス priority service を用いました。

【選考 (IELTS と JMEF 面接)】

IELTS の試験は、大阪や東京などでしか受験ができないため、応募前年の夏休み、丁度帰省しているときに受けました。また、万が一納得がいかないスコアの場合、時間をもって対策できると思い早めに受験した結果、Writing の 8 以外は 9 をいただいて、Overall も 9 でした。IELTS の受験費をもう一度払って Writing を含め、すべて 9 にこだわる必要はないと思いい、そのままにしました。

JMEF の面接は 10 分程度で、最初は応募理由を日本語で問われました。応募理由を長々と話したら、時間制限により途中で切られ、少し焦りましたが、その後は、一番印象に残った症例を英語で説明することを求められました。これは、過去の報告書にも類似の質問があり、しっかりと対策したため、スムーズに説明できました。私はアメリカで学士を取得したこともあったため、最後はアメリカと日本の大学における教育の違いについて日本語で自分の意見を述べて、面接は無事終わりました。最初の応募理由に時間がかかりすぎたせいで、合計 3 つの質問のみで面接が終わってしまった印象でした。

【実習 (病棟)】

新型コロナウイルス感染拡大 (COVID-19) のため、実習中は適切な teaching ができないことを実習開始直前メールで通知されました。当時、オックスフォード市内には COVID-19 の症例はなかったものの、NHS (National Health Service) は COVID-19 に関する問合せ専用ダイヤルを設け、専門家のコンサルが必要な場合は直接感染症内科にある「COVID Phone」につながる仕組みになっていて、患者や GP からの問い合わせが一日中鳴り止まない日々が続いていました。そのため、実際実習が始まると予想通りすべての医療従事者はコロナウイルス感染の対応に追われて、普段の実習と違うと感じました。また COVID-19 感染疑いの患者さんが来られたときの対応も見学させて頂きました。John Radcliffe Hospital は High consequence infectious diseases (HCID) treatment centre ではないため、感染疑いの患者を他の患者や医療従事者に接触することなく病棟までに搬送するルートがなく、初期段階では試行錯誤で混乱するシーンもありました。患者に直接対応する医師二人は、Personal Protective Equipment (PPE) を着用して、自分も含めそれ以外のスタッフは、搬送ルートを確保するため一時的に立入禁止の場所を設けたり、関係者以外の方を他の場所を誘導したりしていました。混乱の中でも学ぶことは多くて、前代未聞のパンデミックに関して、今後どのように受け入れるか、スタッフの専門職問わず、毎日よう議論することになりました。

しかし、せっかくの実習期間で COVID-19 の議論のみに参加することは良くないと思いました。そこで木曜日に Department of Microbiology を見学するときに、たまたま Infectious Disease Consultation Service Team に出会いました。Consultation Service は感染症内科病棟ではなく、全病棟の consultant として働くので、より幅広い症例を実習できると思い、急遽 consultation Service の Dr. Maheshi Ramasamy と Dr. Robert Shaw に許可をもらって参加させて頂きました。原則として Cardiac Center からの依頼を引き受けますが、General Medicine からの依頼も少なくなく、日が暮れるまで休憩なしで回ることもありました。一つの依頼に

対して時間をかけて経過などを辿って、患者さんの生活環境、身内の家族構成、患者さんが今どのように自分の治療を解釈しているか、そして患者の心のケアまで配慮し、患者一人一人にかける時間が長かったです。特に印象に残った場面は難聴の患者さんと接していたときでした。難聴の患者は高音が聞きづらいので、女医の Dr. Ramasamy は声を少し低くして患者と話し合っ、些細な気遣いでしたが、初対面にも関わらず、患者はすぐに打ち解けました。Dr. Ramasamy の丁寧な接し方に感動して、涙ぐんだ患者さんもいました。やはり医師の中でも、Dr. Ramasamy のコミュニケーション力は別格で、短時間で信頼関係を築いており、見学のみでも非常に勉強になりました。

その後、感染症病棟の多忙の日々が続いたため、担当 Consultant の Prof. Angus が私の好きなように実習して良いとおっしゃったので、実習が中止になるまでは日々 Dr. Maheshi Ramasamy と Dr. Robert Shaw のもとで勉強させて頂きました。

【実習（外来）】

病棟以外に Chronic Fatigue Syndrome (CFS) や HIV 外来がありました。CFS は、身体診察や臨床検査で客観的な異常が認められない状況で、日常生活を送れないほどの重度の疲労感が長期間続く状態をいい、説明がつかない疲労が 6 カ月以上継続するものです。血液検査で自己免疫疾患を除外した後、30 分以上かけて問診を聴取することもありました。HIV 外来は Churchill Hospital の旧 John Warin Ward で行っていて、患者さんは数ヶ月ごとに Viral Load を検査して、薬剤アドヒアランスを聴取することが多かったです。

【実習（その他）】

病棟実習や外来がないときは、院内の Clinical Skills Lab で模型を使って様々な手技を好きな時間で練習することができました。そして週 3 回、麻酔科医の Dr. Richards が clinical session を開き、NG チューブ、輸血、心電図、尿カテーテルなど臨床手技の指導を受けました。また、本来は Advanced Simulation という実際の Emergency Room の再現した部屋で医療マネキンを使って、救急症例を経験するコースに参加する予定でしたが、その前に実習が残念ながら中止になりました。

【宿泊】

宿泊は Green Templeton Accommodation に申し込んで、カレッジ敷地外にあるアパート (39 St. Margaret's Road) にしました。アパートに住んでいた大学院生たちはとてもフレンドリーで、すぐに whatsapp グループに招待してくれて、活動の情報など気楽に連絡を取ることができました。宿泊費は多少高かったですが、シャワーとトイレ付きの一人部屋でとても広々でした。週一回掃除もしてもらって、キッチンの設備や備品は共用でした。Wifi は大学のネットワーク (eduroam) を使い、洗濯機と乾燥機は一台ずつしかなかったのですが、無料で使うことができ、とても快適でした。

【交通手段】

宿泊先から John Radcliffe Hospital までバスで 15 分くらいだったので、4 週間の bus pass を購入して、バスを利用しました。朝のバスは時間が正確でとても便利でした。また、Ms. Cook から実習期間中ヘルメットを無料で借りることができ、中古の自転車も帰国時に 50%Cash back で売ることができたので、せっかくなのでオックスフォード市内に出かける時や、スーパーに買い物するときに地元民と馴染んで楽しく使いました。

【観光】

週末はロンドン市内やオックスフォード市内を観光しました。ロンドンではミュージカル鑑賞、Royal Observatory Greenwich の Prime Meridian、他の派遣留学生たちとパブに行ったりしました。オックスフォード市内は Bodleian Library、Radcliffe Camera、Magdalen Chapel の Magdalen Evensong に行ったり、オックスフォードの名所を観光しました。第 3 週末はレンタカーを借りて Cotswolds や Stonehenge を観光する予定でしたが、実習中止のため、第 3 週末の前に帰国することになりました。また本来ならばオックスフォード学生証で色々なカレッジに入ることができますが、COVID-19 感染拡大のため、所属のカレッジ(GTC)しか入れなくて残念でした。

【結語】

実習が中止になったことがとても残念でしたが、英国の医療現場を体験することだけでも今後の医療人生にとって、貴重な 2 週間でした。英国は日本と比べて、医療資源を保守的に使用し、画像や治療介入をしない英国のスタンスもとても印象的でした。例えば、明らかな肺水腫があっても、まずは胸部の超音波検査を行ってから単純写真をとって、CT を撮らないようにしていて驚きました。患者さんへの治療法に明確な解はなく、異なる文化や医療制度によって、医師の Assessment と Planning が違ってくることを実際に経験することで、幸いでした。医師は次の患者さんに対する最善の治療を提供できるように、今後も日々の努力と経験が必要で、lifelong learning にコミットする重要性を、実感させていただいた留学でした。

また、実習外でもいろんな出会いがあって、良き仲間が増えてとてもラッキーでした。偶然 Clinical Skills Lab で出会った現地の学生と一緒に飲んだりして、日本と英国の医学教育と医療制度をはじめ、ライフスタイル、今後の社会など幅広い分野を語り合っ、とても有意義な時間を過ごせたと思います。また、宿泊先の housemate は南アフリカ、オーストラリア、ドイツ、フィンランド、グアテマラなど出身が様々で、学んでいることも地理から医療人類学と聞いたことのない分野など本当に興味深かったです。一緒に料理を作ったり、student supper に招待してもらったり、最後にはピザパーティーで御馳走になり、お互いの文化や分野のアイデアをシェアしてとても楽しい時間を過ごしました。

【謝辞】

この度、応募から派遣までサポートしてくださった医学教育振興財団の先生方、望月さん、オックスフォード大学の Ms. Cook、丁寧な対応していただき大変感謝しています。浜松医科大学では、推薦状を書いていただいた山本理事、五島教授、学務課国際交流・留学生係の青島さん、そしてオックスフォード大学でご指導いただいた Dr. Maheshi Ramasamy, Dr. Robert Shaw, Dr. Leon Peto, Prof. Brian Angus 皆様に厚くお礼申し上げます。

【費用】

交通費（日本－英国間の航空運賃除く）：£30（空港－オックスフォード市内往復）、£61（4週間の SmartZone bus pass）、£32.50（自転車）

宿泊費：£683.64

食費・滞在費：20,200 JPY

観光費：20,000 JPY

実習費：無料

通信費：\$19.00（SIM カード）

グラスゴー大学医学部

University of Glasgow

2020.03.02～2020.03.16

◇慶應義塾大学

浅井 崇博

グラスゴー大学での臨床実習を終えて

慶應義塾大学医学部 6年 浅井 崇博

1. はじめに

この度、医学教育振興財団の「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」プログラムを通じ、グラスゴー大学にて 2020 年 3 月 2 日から 3 月 27 日までの 4 週間の間、臨床実習する機会を頂きました。このような貴重な機会を頂けたことへの感謝の意を表するとともに、今後留学を考えている医学生の方々のお役に立てるよう実習内容について報告致します。

なお、グラスゴー大学には毎年 4 名の医学生が派遣されていましたが、本年度は COVID-19 の影響により私一人での実習となりました。また 4 週間の臨床実習の予定でしたが、3 週目の月曜日に実習中止の連絡がありその時点で終了となってしまったので実習内容については例年に比べ内容が薄くなっているかもしれません。ご了承ください。

2. 応募動機

私は小学校 3 年生から中学校 3 年までの 7 年間で英国ロンドンで過ごした経験があったため、医学部入学当初から短期留学の機会があればぜひ参加したいと思っておりました。大学 4 年の時、大学の国際担当の方からこのプログラムの事を伺い興味を持ったため応募させて頂きました。

3. 応募と準備

財団への応募に際して必要な書類は①応募用紙 ②推薦書 ③成績証明書 ④履歴書 ⑤IELTS 成績証明書 ⑥健康証明書です。応募用紙と履歴書は財団のホームページからダウンロードしました。選考に必要な IELTS のスコアに関してですが、私は高校 3 年生の時に一度受験したことがあり当時のスコアが Overall 7.5 でした。それを下回ることはないだろうと油断をしていたため、本留学のために 4 年の冬に受けた際には Listening 7.5 Reading 7.5 Writing 6.0 Speaking 7.0 の Overall 7.0 という結果でした。その後再度受験する時間が無かったため Overall 7.0 での提出となりました。書類選考の結果が 8 月 8 日にメールにて送られてきて、面接試験は 8 月 26 日に東京で行われました。面接は 10 分ほどで受験生 1 人を面接官 7 人がコの字で囲んだ形式行われました。質問は英語と日本語で、質問された言語と同じ言語で返答するように指示がありました。聞かれた内容としては応募理由や希望する留学先とその理由などでした。

グラスゴー大学への書類提出

8月30日に、面接の結果が届き無事派遣が決まってからは提出書類を準備し、財団のチェックをいただいた後にグラスゴー大学に提出しました。提出した書類は Application Form、予防接種歴を含む健康証明書、犯罪歴証明書、パスポートのコピー、IELTS の成績表でした。

以上の書類をグラスゴー大学に提出し無事に Confirmation of Acceptance for Studies (CAS) を頂きました。この CAS を元にビザを取得するのですが、私は英国の永住権ビザを幼少期に取得していたため短期ビザは不要でした。グラスゴー大学の Application Form には自分の希望する科を記入する欄があり、私は Medicine を第一希望にしていたのですが、配属されたのは第二希望にしていた Surgery でした。

渡英までの勉強としては、慶應義塾大学での海外臨床実習生向けの特別のプログラムがあったためこれに参加し、取り組みました。具体的な内容としては、英語での医療面接、身体診察、プレゼンテーションでした。その後実習に向けて、USMLE Step 1 オンライン問題集を使用して勉強しました。実習科が Surgery に決定してからは手術についての知識を深めないといけないと感じたため、Oxford Handbook of Clinical Medicine で General Surgery のセクションを読み、YouTube で手術動画を見て勉強しました。

4. 実習内容

4.1 実習病院について

今回私が実習させて頂いた Glasgow Royal Infirmary (以下 GRI)はスコットランドのグラスゴー市内中心部の北東端に位置し、50以上の病棟からなり、1000床以上を有する病院で NHS Greater Glasgow と Clyde によって管理されています。GRI では救急科や General Practitioner (GP)からの入院患者の病棟管理や治療が主な役割です。本実習での手術や外来は全てこの GRI で行われました。

4.2 初日

グラスゴー大学医学部の建物(Wolfson Medical School Building)に行き、留学生担当の Mrs. Sutherland にお会いしました。そこでビザとパスポートのコピーを取っていただき大学についての簡単なオリエンテーションを受けました。午後には Occupational Health Appointment が予定されていたため、事前より提出が求められていた Immunization Records と Health Declaration Form を提出し、簡単な診察を終え問題なく終了しました。

4.3 実習スケジュールと業務

1 週目

月	火	水	木	金
Occupational Health Appointment	9:00 GRI 集合 オペ	9:00 Beatson 午後病棟	9:00 内視鏡	9:00 外来見学

2 週目

月	火	水	木	金
9:00 GRI 集合 オペ	9:00 GRI 集合 オペ	9:00 Beatson 午後病棟	9:00 オペ	9:00 外来見学

私が配属された Surgery は日本で言うところの一般消化器外科で、その中でも今回お世話になった Supervisor の Mr. Mackay は上部消化管を専門とされる医師でした。本実習では基本的に Mr. Mackay のスケジュールに沿って手術、外来、内視鏡、水曜日の MDT を見学しました。以下にそれぞれの業務の内容を詳しく説明していきます。

手術について

毎週月曜日と火曜日が手術日でした。今回見学した手術は腹腔鏡下虫垂摘出術 2 件、胃癌に対する幽門側胃切除術、胆嚢摘出術、大腸癌に対する低位前方切除術の計 5 件を見学しました。初週火曜日の 1 件目は見学のみとなりましたが、その日の午後から術野に入れてもらえることになり手術の手伝いをする事が出来ました。それ以降の全ての手術でも術野に入ることが出来ました。私が行った業務としては、患者を待機室からオペ室まで運び、若手の先生と共に消毒などの手術の準備を手伝いました。執刀医の Mr. Mackay が入室されてからは Scrub in (手洗いして術野に入る事)して良いかを確認し、術野に入り機材持ちなどの手術の手伝いをさせて頂きました。また 2 週目には術前の尿カテーテル挿入や縫合なども少しやらせていただける機会がありました。手術中には術中所見や解剖について Mr. Mackay がクイズ形式に和やかな雰囲気ですべてを質問をしてくださり非常に勉強になりました。また私が答えられなかった内容について次の日にきちんと解答できるようにと指示され、自分で調べることでしっかり知識が定着するようにして下さいました。

日本でのポリクリ中にそこまで多くの消化器の手術を見学していたわけではないので一概には言えませんが、英国での手術方法やアプローチが日本と大きく異なるという印象は受けませんでした。しかし、手術中に多くの先生方から「この手術は日本だとどういうアプローチをするの？」などと質問されることが多かったため、早めに実習科が決まった方はポリクリなどで日本で行われているオペについて詳しく見ておくといいかもしれま

せん。

外来について

外来では日本と大きく異なる場面が多く見られました。まず英国では外来に来るほとんどの患者は、基本的な英国の医療システムにより GP や他病院から紹介されてきた患者か再診の患者であったため、いわゆる初診の患者はいませんでした。よって、Mr. Mackay はまずその日に予約が入っている患者リストをチェックし、それぞれの Referral Letter に目を通し確認すべき事項や過去の画像初見などを把握した上で患者を診察室に呼び診察をしていました。診察が始まってからはパソコンを見ることはなく患者と対話することだけに集中していました。その後診察が終わってから、カルテの記録を録音機を使用して全て音声入力で行っていました。この診察方法は日本とは大きく異なりますが、より効率的なのではないかと感じました。日本では診察の途中にカルテに入力するので患者との会話が途切れることなどがしばしばありますが、この方法だと会話がよりスムーズになり、患者にとっても話しやすい環境が作られていると思いました。また診察は必ず握手で始まり、握手で終わります。病態が深刻ではない患者に対しては診察中にもジョークなどを挟んだりして患者とのコミュニケーションや信頼関係を重要視する姿勢が見られました。今回外来で見学することが出来た症例は胃癌術後のフォローアップ、胃 MALT リンパ腫、食道アカラシア、GERD、食道癌、十二指腸潰瘍、ヘルニア、胃ポリープなどでした。

MDT

水曜日は Hyndland 駅から徒歩 3 分ほどのところにある Beatson West of Scotland Cancer Center で行われた MDT (multi-Disciplinary Team) meeting に参加させていただきました。MDT meeting とは多職種による症例検討会のことで、会議室に主に医師や看護師が集まって、主に術前患者の紹介と治療方針について議論するものでした。医師同士だけでなく看護師との議論も活発で、職種関係なく意見が飛び交いチーム医療がとても重要視されているのを感じました。私を含め医学生は会議室の一番後ろの席で見学する形式でしたが、医師の説明がわかりやすく、多くの疾患について大まかな治療方針の流れをつかむことができるので非常に勉強になりました。水曜日の午後は MDT に参加していたグラスゴー大学の学生と共に GRI に戻りベッドサイドティーチング（日本で言うクルズス）に参加させていただきました。

内視鏡見学

1 週目の木曜日は内視鏡の見学もしました。一番の驚きだった事は、日本では恐らく多くの病院で内視鏡検査は消化器内科領域となるので、てっきりこの日は違う先生について見学すると思っていたのですが、GRI では内視鏡も Mr. MacKay が担当していた事でした。このことについて先生に聞いて見たところ、消化器内科の先生が担当することも多いが、外科でも内視鏡のトレーニングは一通りやるので外科で内視鏡が上手な人は手術も内視鏡

も両方やっている人が多いとのことでした。内視鏡見学では早期胃癌に対する ESD とアカラシアに対する バルーン拡張術を見学させていただきました。

5. 現地での生活について

5-1. 寮

グラスゴーの大学院生のための寮である **Maclay Residence** に宿泊しました。一つの Flat に 5 つ部屋があり、各部屋にトイレとシャワーがありました。キッチンのみ共同で、調理器具、食器、電気ケトル、オーブンなど一通りの物は備わっていましたが、調味料等は一切ありませんでした。また部屋にもタオル、シャンプー類、ハンガー、トイレトペーパーなどはなかったので初日に買い出しに行く必要がありました。日用品は **Patrick** 駅近くの **Morrison's** というスーパーで買い揃えることができました。洗濯機と乾燥機は寮の 1 回に共有のものがあり、洗濯は毎回£2.40、乾燥は£1 でした。WiFi に関しては寮内に 1 ヶ月£2.80 の WiFi プランがあったので、それを使用しました。

5-2. 食事

朝は軽くパンなどで済ませ、昼は病院のカフェで食べ、夜は基本的に自炊をしていました。実習初週はかなり疲れていたため病院からの帰り道で見つけたファストフード店 (**Subway**) などで食べることもありました。**Glasgow Royal Infirmary** から寮に帰る間に **City Centre** を通るため食材を買って帰ることも、外食で済ますこともできたため食事には困りませんでした。

5-3. 交通手段

過去の報告書を読むとグラスゴーに留学されていた先輩方は **First bus** のアプリをダウンロードし、4 週間分の定期券 (£50) を購入されている方が多かったと思います。私もそのつもりでいたのですが、初日に **City Center** でタオルなどの買い物をするのにバスを使用した際に、大幅に遅延したりそもそもバスが来なかったりとトラブルが続き、毎日病院へ実習に行くのに時間が読めないのは困ると思ったため、近くのサイクルショップを探し中古の自転車を £60 で購入しました。3 月のグラスゴーは雨の日も多いですが、運も良く土砂降りの日は少なかったため、雨の日はレインコートを着て病院まで頑張って通っていました。また、バスを使用したとしても寮から一番近くのバス停まで徒歩 10~15 分ほどはかかってしまうので、個人的に自転車を買ったのはかなり良い判断だったと思います。自転車は実習最終日に £20 で売ることができました。

6. 観光

1 週目はリバプール、マンチェスターに行きました。グラスゴーで車を借り、リバプールまで行きました。サッカー観戦が趣味なので、リバプールではプレミアリーグの **Liverpool**

FC vs Bournemouth FC、マンチェスターでは Manchester United vs Manchester City の試合を観戦しました。2 週目は飛行機でロンドンに行きました。早めに飛行機を予約すれば往復£60、片道 1 時間半ほどで行けるのでかなりおすすめです。

そのほかにも実習が早く終わった日などは自転車で Glasgow Central, Kelvingrove museum, Glasgow University, Glasgow Cathedral などを観光しました。現地の医学生やグラスゴー大学に留学している日本人の学生などとも仲良くなれたので食事に出かけたりもしました。

7. 参考書

First Aid for USMLE step2 CS

症例の問題集になっており、問診と診察を勉強するのに使用していました。

Oxford handbook of Clinical Medicine

コンパクトで持ち運びがしやすい上、内容も詳しく、カラー印刷で画像が載せられています。現地の医学生も持っていたのでおすすめですと思います。

6. おわりに

COVID-19 の影響でトラブル続きの短期留学でしたが、間違いなく多くのことを吸収できた 2 週間でした。ちょうど慣れてきたところで実習が終了してしまったのは非常に残念でしたが、英国での医療がどのようなシステムなのか、英国で働くということがどういうことなのかを実際に現場で体感できたことで視野が大きく広がったと感じます。このような機会をくださった医学教育振興財団の方々、サポートしてくださった望月さん、現場でお世話になった先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

7. 費用

航空券	14 万円
交通費 (ロンドン⇄グラスゴーなど)	2 万円
寮費	£682.56
食費	£80
日用品 (タオル、シャンプー等)	£30
自転車	£60
SIM カード	

令和元年度 英国大学医学部における臨床実習のための短期留学報告書
(ウェブサイト版)

発行 公益財団法人医学教育振興財団
編集責任者 北村 聖

© 2020 Japan Medical Education Foundation. All rights reserved.